

〔2〕 書 叢 著 名 界 世

活 復

譯 三 賢 村 野 • 作 原 イ ト ス ル ト



行 發 社 剛 金 京 東



始





世界名著叢書
復活
オレソン 著 村上春樹 譯

東京 金剛社 出版

大正
14. 1. 19
内交



特279-31



150226

復活

復活

トルストイ原作

野村賢三譯

一

何十萬といふ人間のたたくと住む、ちつぽけな土地に石を敷いたり木を伐り倒したり鳥獸を追つたり、石油や石炭の煙で空を漲らさうとしたりなどしても、——そしてそれが尙都會の真中だとしても、春は矢張り春である。

ぽか／＼と暖かな陽が照り、匂やかな風が薫り、蘇つた草が遊歩地の芝生や石疊の隙間など、至る所に萌え出した。樺の木や白揚や山櫻などは、護謨のやうに軟かな葉を擴げ、菩提樹には若芽が脹れ上つてゐた。鶉や雀や鳩などはいそ／＼

と巢の支度をし、日向には蠅がぶん／＼唸つてゐた。かうして木や鳥や虫などは皆喜々として楽しんでゐたが、淺ましいことに人間だけは、もう一人前になつた男や女や、お互ひに騙し合つたり虐め合つたりして止まないのだつた。

殊に地方にあるこの監獄では、實際誰一人として春を神聖な大切な、そして美しい季節だなどと考へてゐる者はなく、それよりも、丁度前日廻つて来た番號附きの役所の印の捺さつた通告書の方が、大切なのであつた。その通告書には、四月二十八日午前九時、目下拘留中の三囚人、男囚一人女囚二人（主犯たる一人の女囚は特に分離して）出廷の事と記されてあつた。そこで今、即ち四月二十八日の朝八時、厭な臭ひのする薄暗い女囚檻の廊下へ看守長が入つて来て、とある檻房の鐵錠をがちやつかせて戸を開いた。強い悪臭がむつと襲つて来たので彼は、『マ스로ワ出廷』と呼ぶと直ぐまた戸を閉ぢて了つた。

檻房の中では何か駆け廻るやうな烈しい音がして、女の喚き聲や、素足で床板

をばたつかせる音が聞えた。

『さあ早くせんか』と看守長が呼ぶと、一二分経つて、小柄ながらふつくらと肥つた若い女が、戸口から素速こく抜け出して看守長の前へ現れた。彼女は白いジャケットと下袴の上に鼠色の上衣をつけ、麻の靴足袋と牢屋靴を穿き、頭には白いハンケチを巻き、その下から眞黒い髪を一房二房前額にわざとらしく縮らしてゐた。顔は長い牢屋生活をした者に特有な白い色で、小さくて幅の廣い手や、太い頸筋なども矢張りさうだつた。たゞ黒い眼が、片方は少し斜視だが、生氣のない顔ではそれが一際眼立つて人を惹きつけるのだつた。

彼女はふつくらした胸を突き出し體を反り返らせてやつて来た。そして廊下へ出ると頭を少し背後へ傾けて、看守長の眼を見詰めながら命令をでも待つやうに身構へした。

看守長が戸を閉ぢようとする途端、一人の老婆が顔を突き出して、マ스로ワに

何か云はうとした。戸は閉ぢられた。と中で女の笑ひ聲がした。マスロワは格子窓の方を見て微笑した。

『氣をお付け、何を訊かれても同じことを云ひ張るんだよ。要らぬことは喋らずに』と格子に顔を當てた老婆は歎げ聲で云つた。

『え、何方にしたつてもうこれよりブツな目には會ふまいから。私も早く何うにかきつぱり決めて貰はなくちやあ……』

『勿論決まるさ』と看守長は豪さうな顔付きで云つた。『さあ行くんだ！』

看守長を先に二人は、女囚檻よりもつと騒々しく汚い男囚檻の間を格子窓から覗く多くの眼に見送られながら、石段を降りて事務所に入つた。二人の兵士が其處に待つてゐた。事務所の書記は一枚の紙片を兵士の一人に渡して、『この女囚を連れて行け』と云つた。

百姓上りで赤い痘瘡面の兵士は、上衣の袖にその紙片を挟み、ちよつと囚人

を見てから、他の肩幅の廣い同僚へ目配せした。

囚人と兵士は監獄の構内を出ると、粗末な敷石道の街を行つた。辻馬車の馭者や、小商人や、料理人や、職人や、町役人などは立ち止つて皆好奇の眼を光らした。中には、『一體何をしたのだらう？ 俺達には到底出来ない事だらうが……』と首をかしげて考へる者もゐた。子供等は恐々見てゐたが、兵士がついてゐるので安心した様子だつた。町から歸りかけの炭賣り百姓は駆け寄つて来て、マスロワに一錢施した。彼女は顔を赤らめて何か口の中で呟いた。多くの人々が自分を見てゐるのだとは判つてゐたが、彼女はちよつと横眼を呉れたばかりで振り返らうとはせず、自分がかうして人目を惹いてゐるのが可笑しくてならなかつた。それに監獄の中とは異つて、この生々した空氣が彼女を喜ばした。だが暫く歩かなかつた上に、形の悪い牢屋靴を穿いて凸凹の敷石道を歩かねばならないのが、堪らなく苦しかつた。穀物屋の傍では、人馴れた鳩が悠々と歩き廻つてゐた。痛い

足を引き摺つたマスロワは、危くそれを蹴飛ばさうとした。鳩は追に驚いたか、羽ばたきして飛び上つた。彼女は思はずにつこりしたが、ふと自分の今の境遇を思ひ出すと、深い溜息を吐いた。

二

女囚マスロワはかういふ經歷を持つた女だつた。

彼女の母は、二人の姉妹の共有になつてゐる酪農物の雇女の娘で、定つた亭主は無かつたが、毎年定つたやうに赤兒を一人づゝ生んでゐた。そして洗禮だけは受けさせるが、その後はどかく邪魔扱ひにして、遂には乾し殺して了ふのだつた。かうして五人の子供を殺した。旅稼ぎのヂブシーとの間に出来た六番目のも、矢張り同じ運命に葬られるのだつたが、幸運にも女主人の一人の爲めに助けられて無事に育つことになつた。その兒が三つの時、母親は病死したので、祖母に養

はれてゐたのを、主人が憫んで引き取ることになつた。それがマスロワなのである。

幼兒は段々愛らしく達者に成長して行くので、女主人は非常に楽しく思つた。彼女の名附親になつた妹の方の主人、ソフイヤ・イワーノヅナは、優しい氣質の人であつたが、姉のマリヤ・イワーノヅナは氣性の張つた人だつた。二人の異つた教育法が彼女を何處かお嬢さんのやうでもあるし、また何處か奉公人のやうでもある娘に育て上げた。彼女はカチューシャと呼ばれた。それはカーチエンカと云ふ程上品な呼び方ではなかつたが、然しカーチカと下女のやうに呼ばれるよりはよかつた。幾度か縁談もあつたけれども、まだ結婚する氣にはなれなかつた。それに今更百姓の女房などになる氣には逆もなれなかつた。かうして彼女が十六になつた時、老主人達の甥に當る、金持の若い公爵の大學生が、この家に来て暫く逗留したことがあつた。そしてカチューシャは始めて戀を知る娘になつた。

それから二年後、同じ人が士官になつて、その聯隊へ赴任する途中、また伯母達の家に四日泊つた。出立の前夜彼は到頭カチューシャを手籠めにして百ルーブリの紙幣を無理に握らしたまゝ立ち去つて了つた。五ヶ月目になつて彼女は始めて自分の妊娠に氣付いた。それ以來彼女はその事ばかりが氣に懸つて、勤めも怠け勝ちになり、我儘から主人に反抗したりしたが、遂に自分から暇を呉れとまで云つたので、主人達も愛想をつかして見放して了つた。

それから彼女は或る警官の家へ雇はれたが、五十にもなる主人が、云ひ寄つた舉句亂暴なことまでしようとしたので、散々罵つた上、彼の胸を厭と云ふ程突き飛ばして其處を飛び出した。彼女は漸く氣持が荒み始めた。殊に臨月が近づいてゐたので奉公口も探されず、村の産婆の家へ身を寄せた。お産は輕かつたが、産後に流行の熱病を病んだので、赤兒は育兒院へ遣ることにした。が赤兒は直ぐ死んで了つた。自分で蓄めた二十七ルーブリと、公爵から渡された百ルーブリと、都

合百二十七ルーブリの金も、使つたのと借りられたので其處を出る時には、僅か六ルーブリになつてゐた。そこで今度は林務官の家へ入つた。がこの妻君持ちの林務官は、主人の威光と生來の抜目なことで、厭がるカチューシャを欺いて到頭手に入れて了つたが、間もなく妻君がそれを嗅ぎ付けて、二人きりでゐる所へ踏み込んでカチューシャに打つて掛つた。そこで烈しい掴み合ひとなり、結局彼女は給金も貰はずに追ひ出されて了つた。止むを得ず彼女は町に住む伯母を頼つた。伯母の亭主はやくざ者だつたので、伯母は自分で小さな洗濯屋をしてゐた。カチューシャにも洗濯女になれと勧めたが、彼女はそれをする氣になれなかつたので桂庵に頼んで、或る女主人の家へ雇はれた。一週間も立たぬ中に、總領の口髯を生やした青年が、うるさく彼女に付きまとい出したので、少しも油斷がならなかつた。所が早くもそれに感付いた母親は、罪を皆カチューシャに負はせて追ひ出して了つた。

彼女はまた口を探し廻つたが駄目なので桂庵へ行つた。丁度其處に居合はしや女が親切にも、自分の家へ相談に來いと云つて所書まで呉れたので、こにかく尋ねて行つて見た。すると女は丁寧菓子や甘い酒などで持てなしたがその間に何か手紙を認めて召使ひを外へ出した。夕方になると背の高い髯の白い男が人つて來て、彼女を見るとや／＼と笑ひながら、無遠慮にふざけ出した。

やがて女將は男を次の間へ呼んだ。

「田舎出で、ほんこの初心なんですからね」

そんな言葉がカチューシャに聞えた。今度は彼女が呼ばれた。あの男は作者で金持だから氣に入りさへすれば幾らでも出すがと口説かれた。で彼女は月二十五ル一ブリで話をまとめた。

旦那に借りて貰つた部屋の隣りに、若い氣さくな店員がゐたが、彼女はいつかそれと出來合つて了つた。彼女は旦那に事情を打ち明けて手を切り、二人で小

な世帯を持つた。所が男は或る日商用だと稱して出かけたきり、終に歸らなかつた。彼女は捨てられたのだ！

女一人でやつて行くにはどうしても黄色い鑑札(淫賣婦の鑑札)が必要だつたので、ひと先づ伯母の家へ戻つた。石鹼の湯氣が一杯に立ち籠めた暑苦しい仕事場で、汗みごろになつて働く色青ざめた女達を見ると、自分もやがてそんな運命に陥るのではないかと空怖ろしくなつた。一人ぼつちの行末を思ふと、全く暗い氣がした。以前から煙草は喫み始めてゐたが、店員に捨てられてからは、自棄酒をもあほるやうになつた。みんな寂しさを忘れようが爲めである。

彼女は到頭女街の手に掛ることになつた。女街は言葉巧みに伯母を説き伏せ、カチューシャには、都會の大きな遊女屋で稼ぐことの有利なのを説き立てた。彼女は多くの男につきまとはれて、随分踏みつけにされて來た今迄の女中奉公を續けるよりは、寧ろ法律の保護の下に公然と貞操を賣る境遇に身を置かうと決心し

た。さうなれば最初自分を誘惑した公爵や、自分を欺いた店員や、その他自分を愚弄した男達への面當にもならうと思つた。それに衣服の贅澤が思ふまゝ、といふ女衞の話が彼女の心を惹きつけた。素晴らしい衣装にくるまつた自分を想像するだけでも嬉しかつた。その晩彼女を乗せた辻馬車は、有名な妓樓、カロリン、アルベルトワナ、キターエワの門を潜つた。

その日からカチューシャは、人にも神にも背いた生を送ることになつた。朝寢怠惰、朋輩との口論、化粧、飽食、女將との衝突、やがて電燈の眩い大廣間へ客の登樓、囃し立てる、踊り廻る、ふざける、終には不潔なる臥床へ。老人、中年青年、獨身者、妻子持、商人もあれば軍人もあり、大學生もあれば中學生もあるアルメニヤ人、ユダヤ人、鞑靼人、金持もあれば貧乏人もある。あらゆる階級、年齢、性質の差別なく、金銭で買はれる卑しい肉の奴隷生活！同じ事が毎日續くとして一週間毎には警察へ出頭して、人間ばかりでなく動物にさへ、その罪惡を

慎むやうに特に天が賦與した羞恥の情を踏み躪り、無恥な警察醫の慰み半分の身體検査によつて、更にまた一週間の罪を犯すに可能な許可を受ける。かくてまた同じやうな恥を重ねつゝ夏も冬も過ぎる。そして彼女等には歌ふべき春も、祈るべき秋も、祭日すらも永遠に見舞つては來ない！

彼女は七年間に二度住替へをした。病院へも入つた。然るにその廓生活の七年目に端なくも一事件が起つて、投獄せらるゝに至つた。それが、三ヶ月以上も怖ろしい罪人達と一緒に苦しい監獄の中に檻禁せられた擧句、今やつと法廷に引き出されて取り調べを受けようとしてゐることなのである。

三

マシロワが遠い道を二人の兵士に護られて、漸く裁判所へ着いた時、最初彼女を犯したドミトリー・イワノギツチ・ネフリユード公爵は、まだ自分の家の氣

持よい寢臺に横たはつて、煙草を燻らしつゝ、昨日あつた事や、今日の事に就いて考へてゐた。世間では金持貴族のオルチャーギナ家の娘と彼が結婚するやうに噂してゐるが、彼は昨夜もそのオルチャーギナ家で夜を更かしたのである。

起き上ると彼は先づ化粧部屋へ行つて、齒と爪を磨き、手や顔を洗つた。次の部屋で冷水浴をして化粧を済ますと服を着更へて食堂へ行つた。其處へネフリユードの幼時からこの家にゐる古い召使ひで、先頃母が亡くなつてからは家事取締りをしてゐる、アグラアフェナ・ペトロウナといふ中年の婦人が入つて來た。

「オルチャーギナ様からの御手紙でございます。使はまだ私の部屋で待つて居ります」

彼女が立ち去るご公爵は薫りのする手紙の封を切つた。

(貴方の記憶掛りの御用として一筆御注意申し上げます。本日四月二十八日は陪審官として貴方は裁判所へお出ましにならねばなりませんのでした。それで貴方

の例の安受合で御約束なされた美術館行は、自然お流れになりましたわ。マリヤ
オルチャーギナより。

二伸、今晚の晩餐には是非御出席下さいますやう、母からの傳言でございます(ネフリユードは顔を顰めた。これはオルチャーギナ令嬢が、ごうかして彼を彼女に惹きつけようとして、もう二月もの間繼續して來た手段である。春青の時を過ぎた者は餘程の戀愛に落ちない限り、一般にはとかく結婚を躊躇ひ勝ちである上に、公爵には尙他の事件があつた。それは或る夫ある女との絶つことの出來ない關係であつた。彼は女には寧ろ臆病の方だつたが、そこへつけ入つて、或る貴族長の妻君か云ひ寄つたのである。今では彼は深く心に責められてゐるが、無理に切れる勇氣もなかつた。その爲めにオルチャーギナ令嬢へも結婚の申し込みが出來なかつたのだ。然し一週間前に、その女には斷然と絶縁状を送つて置いた。今迄の罪は全部自分が負はうと云つてあつたのだが、女からはまだ返事がない。そ

れはつまりいゝ前兆なので、彼女が不服ならば直ぐ返事をよこすか、自分で出かけてさへ来る筈だったからだ。彼女が近頃また或る士官と関係してゐるといふ噂は、流石に彼を少しは不快がらせたけれど、結局それは彼に安心を齎らした。

珈琲を呑み終ると、彼は召集状を出して裁判所への出頭時間を見、それから公爵令嬢へ、晩には伺ひますといふ返事を書くべく書齋へと立つた。然し二度ばかり書き損じたので、召使を呼んで、コルチャーギナ家の使ひには言葉の返事を與へさせながら辻馬車を呼ぶやうに命じた。

玄間へ出ると顔馴染みの馭者がゐて云つた。

『實は昨晚コルチャーギナ様のお邸へ御前様をお迎へに上りましたが、もうお歸り遊ばした後でございまして……』

此奴まで自分達の關係を知つてゐるなど、公爵は思つた。とまた令嬢との結婚問題か頭を擡げて來た。彼女は上流の家庭に育つただけに、すべての物腰が普通一

般の者などは異つてゐた。その生れながらの品位に何よりも彼は感服した。だが世間にはマリヤよりもつと氣質のよい娘がゐないとも限らないし、それに彼女はもう二十七歳といふのだから、彼が最初の戀人であるかは疑はしい。たとへ彼女が彼と知合ひになるかどうか判らなかつた以前だとしても、過去に他の男を愛した女と結婚するのは彼の誇りが許さなかつた。

『何しろワシイリエヴナ（貴族長の妻）からはつきりした返事が來てからだ』と彼は獨語した。

裁判所へ着くと、もうどの廊下も非常に混雜してゐた。ネフリユードが陪審官の控所へ入つて行くと、其處に居合はした十人ばかりの人々は我先にと彼に挨拶した。彼はいつも當然のやうに人々からかうした尊敬を拂はれた。何故かそれは彼にも判らなかつた。萬人に勝れてゐるなら格別、殊には此頃の彼の生活は決して取り立てて云はるべきものではなかつた筈である。

裁判長は背の高いでつぶりした男で長い灰色の頬髯を生やしてゐた。彼は今朝方、以前関係のあつた女から、イタリーホテルで暫くお待ちするから来て呉れといふ手紙を受け取つた爲め、早く公務を片付けて會ひに行かうと思つて、特に早出をして來たのである。朝、夫婦喧嘩をして家を出て來た一人の判事は、ぶりぶりしながら煙草を吹かしてゐた。

やがて開廷された。拔劍の憲兵に護衛されて一人の男囚と二人の女囚が出廷した。男は旅館の下男のカルチンキン、女の一人は同じ雇人のポーチコワ、もう一人はカチューシャ・マスロワであつた。法廷の人達の眼は一齋にマスロワの生々した白い顔、黒い眼、獄衣の下に脹らみ上つた胸に惹きつけられた。

宣誓、陪審官長の決定、その他の事が人々を満足させる嚴肅な規律と秩序の下に行はれた。

形の如く訊問が始まつてマスロワの番となつた。

「氏名は？」マスロワが腰掛けたまゝなので女好きの裁判長は、「起立しなさい」と優しく氣に云つた。彼女は早速立ち上つて胸を張り愛嬌のある黒い眼を微笑しながら裁判長を見上げた。

「名は何と云ふ？」

「リュボーウイと申します」

ネフリユードは、鼻眼鏡を掛けてちつと囚人を見詰めてゐたが、「はてな、そんな筈はない」と彼はマスロワから眼を離さずに考へた。「リュボーウイ？そんなことは決して……」

裁判長は云つた。

「此處にはリュボーウイとは書いてない。本名は何と云ふか？洗禮を受けた時の名だよ」

「以前はカテリナと申しました」

「そんなことがあるものか」とネフリユードは獨語したが、今はもう確かに彼女に違ひないことは明かだった。青ざめてはゐるが、その輪廓の好い顔には、忘れられぬ特別な愛らしさが、唇や生々した眼や、聲や、わけてもその無邪氣な笑顔や身のこなしにあつた。

裁判長はまた優しい聲で訊ねた。

「お前の父稱は？」

「わたくし、私生兒です」

「でも名附親があつたらう」

「はい、ミハイロヅナと申します」

「一體この女はどんな罪を犯したのだらう」とネフリユードは思ひ悩みながら息も吐けなかつた。裁判長は問ひ續けた。

「お前の姓は？」

「母方の苗字はマスロワと申します」

「身分は？」

「平民です」

「宗教は正教會か？」

「はい」

「何をしてゐたのだ？」

「わたくし、稼いでゐました」

「何を稼いでゐたのだ？」

「御存じの癖に」かう云つて彼女は微笑した。がその微笑にも、吐くやうなその言葉にも、何となく恐れるやうな悲しい痛ましいものがあつたので、裁判長も思はず赤面し、暫くは法廷もしんとした。と傍聽人の中で一人笑ふ聲がした。誰かが「しつ」とそれを制した。

裁判長は更に訊問を續ける。

『前科はあるか？』

『いゝえ』マスロワはそつと溜息を吐いた。

『起訴状の謄本を受けたか？』

『はい、持つて居ります』

『宜しい、掛けろ』

彼女は少し後へ退つて、貴婦人がするやうに裾をかゝげて腰を掛けた。

書記は立ち上つて起訴状を朗讀した。先刻からちつとマスロワを見据えてゐた

ネフリユードの心の奥底にひそむ靈魂へ、今や烈しい懊惱が深く喰ひ込まうとしてゐた。

この事件の内容といふのは次のやうなものだつた。

西比利亞の商人スメルコフは、或る日カチューシャの客として登樓し、遊興し

た後、自分の旅館へ行つて金を持ち來させる爲め彼女に鍵を渡した。彼女にそれを果させてから、また暫く遊興して、彼女を伴つて旅館へ歸つた。彼女が疲れ切つてゐるにも拘らず、スメルコフは容易に彼女を手離さなかつた。遂に二人は口論を始めたが、スメルコフはその仲直りのしるしにとて、自分の指にあつた寶石入りの指環を彼女に與へた。然しまだ彼女は歸されなかつた。その時旅館の雇人カルチンキンといふ男が、一包の藥を彼女に與へて、それを客に吞ませれば眠りつくだらうと云つた。彼女は全く睡眠劑とのみ信じてそれをブランドーに入れて飲ました。スメルコフはその爲めに死んで了つた。

訊問がまた始つてマスロワの番になつた。

『マスロワ、お前はスメルコフの鞆から、彼の鍵で二千六百ルーブリと指環を盗み、その上旅館で毒酒を吞ませて殺害したといふのだが、事實どうだ。服罪か？』
『わたくし、何も悪いことは致しません』彼女は早口で云つた。

「指環はスメルコフさんが自分で呉れたのです」

「金を盗取したことは？」

「いゝえ、私はあの人から四十ルーブリ貫つたゞけです」

「宜しい、では薬を入れた酒を飲ましたといふことは？」

「え、飲ませました。あれは眠り薬で少しも毒にはならないと云ふことでしたから。私はたゞ早く歸りたかつたのです。私が……人を殺さうなんて……そんなことを……みんな神様が證人に立つて下さいますわ」

十分間の休憩になつたので、ネフリユードは陪審員の部屋へ行きながら思はず
呟いた。

「果してあの囚人はカチューシャだつた……」

彼どカチューシャとの關係は次のやうであつた――

四

ネフリユードが始めてカチューシャに會つたのは大學三年の頃で、田舎の伯母の家に、借地法の論文を書きに行つた暑中休暇のことだつた。彼にとつてはそれは丁度青春の氣の満ち溢れる時代で、その年彼は學校でスペンサーの社會平衡論を讀んだ。土地私有に關するスペンサーの意見に激勵された彼は、やがて自分が相續すべき廣大な土地に對する殘忍不正なる私有權を放棄し、それを百姓達に分配してやらうと決心した。彼が書かうとした論文はかうした土地問題に就いてであつた。

彼は朝早く起きた。日の出前の朝靄の中を丘の下の小川へ水浴に行つたり、時には珈琲を終ると直ぐ書齋に籠つて論文を書いた。がまた時としては田圃や森林を彷徨つた。食事の時には伯母達を楽しく笑はせた。その他馬に乗つたり、舟を漕

いだり、夜は讀者かカルタに過すのを常とした。
 多くの夜、殊に月夜には、何となく情慾に唆られて寝つけないので、色々なこ
 とを夢見ながら庭をいつまでも歩き続けた。

最初の一月は夢の間に過ぎた。女學生のやうな下女のやうなカチューシャには
 別な注意も起らなかつた。彼はまだ十九の純潔な青年で、若し女を夢見るとすれ
 ば全く單に未來の妻とすべきものだけで、他の女はすべて、彼にとつては女では
 なくたゞの人間だつたのである。

夏の昇天祭が來た。伯母の家では隣家の人達——二人の少女と中學生、同居人
 の美術家——を招待した。お茶が終つてから彼等は牧場へ出てゴレールキ（鬼ごつ
 ち）をして遊んだ、幾度か組を變へた後で、ネフリユードとカチューシャが組に
 なつた。

鬼になつた美術家に追はれたカチューシャは、近くにあるライラックの茂みの

うしろへ駆けながら、ネフリユードにも隠れるやうに眼配せした。二人が一緒に
 なつて手を握り合へば、鬼はもう彼等を捉へる譯には行かない規則だからである
 ネフリユードは然し其處にあつた小さな溝に氣付かなかつた爲め、つひ跪いて手
 を摺りむいた。眼を輝かせて駆け寄つたカチューシャはネフリユードにしがみつ
 いた。二人はしつかり手を握り合はした。

『まあ、お怪我？』

『溝があるなんて知らなかつたので』と彼はちつと手を握つたまゝで答へた。彼
 女はする／＼と彼の方へ引き摺られるやうに寄り添つた。彼もいつか夢心地で彼
 女の方へ寄りかゝつた。そして彼女がちつと動かないので、いきなり力を籠めて
 その手へ唇を押し當てた。

『あらつ！厭！』

つと男から離れると、花が散つて白くほゞけたライラックの枝を折つて、ほてつ

た顔を煽ぎながら、もう一度男の方をちらと見るとそのまま、駆け出して行つた。その時から、彼と彼女の間には、純な青年男女の間に有り勝ちな、淡い戀が萌え出したのである。お互ひがこの世に一緒に生きてゐるといふことを考へるだけで彼等は幸福になれた。

カチユーシヤは随分忙しかつたが讀書は好きだつた。ネフリユードは彼女にツルゲーネフやドストエフスキーなどの小説を貸してやつた。彼女はしんみりしたツルゲーネフの物が一番好きだつた。

二人のかうした氣持の變化に氣付いた伯母達は、悪いことになりはしまいかと怖れて、ネフリユードの母へ手紙さへ書いた。然しネフリユードの純潔さは、女の肉體に關する考へなど少しでも起らうものなら、それこそ戰慄する程であつたが、一人の詩人肌の伯母ソフィヤが、ネフリユードが例の思ひ切つてつきつめる性格から、身分の低いカチユーシヤと結婚する決心をしやしないかと怖れたのは

尤もであつた。

到頭別れる日が來た。カチユーシヤは伯母達と一緒に玄關まで送つて來た。涙の一杯溜つた斜視の眼でちつと見詰められた時、ネフリユードも二度と手に入らない美しい貴いものを、置き去りにするやうな氣がして胸が塞がつた。

『さようなら、カチユーシヤ、色々御世話様になつたね!』

『さようなら、ドミートリイ・イワノフ井ツチ様!』

優しい聲でそれだけ云ふと急いで家の中へ駆け込んで、カチユーシヤは長い間しくしくと泣いてゐた。

それから二人は二年以上會はなかつた。二度目に彼が彼女を見たのは、彼が士官になつて所屬の聯隊へ赴任する時だつた。然し彼はもう三年前の彼ではなかつた。今の彼は墮落した立派な自我主義者である。曾ては神秘的な魅力であつた女も今はたゞ快樂の玩具たるに過ぎなかつた。軍隊生活がかくも彼を墮落させたので

ある。「我々は生命を的にかけてゐる人間だから、不道德位は許して貰はなければ、と云ふより、それが絶體に必要なのだ」軍人以外の人間なら、心に深く恥ぢて堪えられさうもない生活をも彼等は却つて誇にしてゐる。でネフリユードが再び伯母の家へ寄つた眞實の理由は、カチユーシヤを見たい爲め、否、彼自身は意識してゐなかつたにせよ、それ以上或る卑しむべき欲求があつたからである。彼が其處へ着いたのは三月も末の、雪解の始まつた復活祭前の金曜日だつた。豫期してゐたカチユーシヤの姿は、馬車のベルが鳴つても出て來なかつた。

『まあよく來てお呉れだつたね』ソフイヤは彼に接吻しながら云つた。『マリヤがちど気分が悪いので教會へ行かないで、家で晚餐式をしようとしてゐる所だよ』

『それやいゝでせう』彼も伯母の手に接吻した。『やあ御免なさい、あなたの着物まで濡らして了つて』

『まあ部屋へいらつしやい。大變お濡れだね、おや立派なお髯が生えたのねえ。』

カチユーシヤ、カチユーシヤ、珈琲を持つて來てお上げ、大急ぎで

『はい只今』

聞き覚えのある優しい聲だ。彼は急に元氣になつた。

部屋へ入つて着物を新しくしようとしてゐると、聞き慣れた足音がして、やがて戸を叩く音が聞えた。それはカチユーシヤでなくて誰であらう。

『お入り!』

カチユーシヤは前より一層美しく色つぼく見えた。清淨で、純潔で、無垢で、心持が好かつた。

『よくいらつしやいました。ドミートリイ様』と彼女はおどく／＼云つて顔を染めた。

『やあ御機嫌よう、達者かい』

『はい、有り難うございます。お氣に入りのピンク石鹼とタオルを伯母様から』

「有り難う、伯母様にお禮を云つとくれ」

品物を置いて、彼女はにつこりと微笑で答へながら立ち去つた。たゞ一晚逗留して行く筈だつたネフリユードは、彼女の顔を見ると、復活祭が終るまでゐたくなり、オデッサで落ち合ふ筈だつた友人のセンボックに、此處まで来るやうにと電報を打つた。彼は白いエプロンをかけた彼女を見ると、以前と同じやうにわく／＼と心が躍るのを覺えた。何よりも互ひの視線が會ふとばつと眞赤になる彼女の顔を見ると、彼は遺瀨ない惱ましさに襲はれるのだつた。同じ戀でも然しそれは以前の戀とは性質が異つてゐた。以前のはそれがはつきりと戀であるかどうかも知らず、尙戀といふものは一生涯一度しか感じられないものだ。彼は思つてゐた。だが今度はまさしく自分が戀に落ちてゐるのを知り、それが嬉しくもあつたが、その戀がどんな種類のもので、何處に行き着くか、臍氣ながら解つてゐた。それ故に復活祭までの二日間、動物的本能と良心との人知れぬ間斷なき苦闘を彼

は心に味つた。早く此處を立ち去らねばならぬと思ひながら、到頭彼は其處に途留して了つた。

復活祭の前夜、儀式を行ふ爲めに牧師と補祭が招かれて來た。儀式の席では彼はカチューシャの方ばかり見詰めてゐた。それが終るとまだ宵の中なので復活祭は始まつてゐなかつたが、彼は寢ようとして立ちかけた。すると老婢のマトリヨーナ・バーウロウナが教會へ行く支度をしてゐたので、彼も一緒に行くことにした。

五

ネフリユードにとつて、この早朝の法會は、彼の生涯中最も生彩ある記憶の一つとして長く後まで残つた。闇の道の此處彼處にある雪の明りに馬車を驅りながら、ランプの列で照らし出された教會の境内へ入つた時、儀式は既に始まつてゐ

た。

ネフリユードが、マリヤ・イワーノウナの甥だと知ると百姓等は丁重に、人で一杯になつた會堂へ案内たし。

右側は百姓席、左側は婦人席だつた。男達は十字を切つて體を屈ましたり起したりしてゐた。女達、特に老婆達は蠟燭に周まれた聖像を見詰めて十字を切つたり、合掌したりして、頻りに小聲で念じた。きら／＼と輝くキャンデラブラ（萬鈞燈）には小蠟燭が一杯點火された。樂席からは太いバスと、子供の高い聲が入り混つた面白い調子が響いて来る。中央の特別席には地主や警官や電信局員や商人達が着席してゐた。そして法壇の右側に、マトリヨーナと並んで、青い飾り帶のついた白い衣服を着て、眞赤な髪飾りをしたカチューシャが控へてゐた。

總てが壯嚴で嚴肅で美しかった。黄金の十字架を幾つも下げて銀糸で織つた祭服を纏つた牧師や補祭、金銀の飾りのある白衣の教會書記や歌手、最上の晴着を

つけた素人唄手、舞踏樂のやうな頌歌、花で飾つた大きい蠟燭を手にした牧師が次々と来る信者に祝福を授ける有様、「基督は復活り給へり、基督は復活り給へり」と繰返す叫び聲など、總てが美しかった。だが中でもとりわけ、青い飾帶のついた白い着物を着て、眞黒い髪に赤い髪飾りをし、恍惚とした眼を輝かしてゐるカチューシャが一番美しく見えた。

ネフリユードは、カチューシャが此方を見ないでも、自分のゐることは知つてゐるのだと思つた。で祭壇の方へ歩み出ようとして、彼女の傍を通りながら顔を合せた。そこでふと思ひ付いたのでかう叫びた。

『伯母さんは法會が濟んだら精進を止めると云つてたよ』

『存じますのよ』と彼女は可愛い、顔にはつと華かな血潮を漲らし、無邪氣に輝く眞黒い眼で、ちつと彼を見上げながらにつこりした。

この時、教會書記が聖水を入れた壺を持つて來たが、ネフリユードに敬意を拂

つて道をよける爲め、法衣でカチューシャを押し退けて通つた。彼は腹を立てたこの教會に、いやこの世にある一切のものは、カチューシャの爲めに存在するやうに彼には思はれたので、よし他の一切のものが侮辱されても、彼女だけは決して侮辱されてはならないものだ。聖像の周圍の黄金も彼女の爲めに輝き、總ての蠟燭も彼女の爲めに燃え、「基督は復活し給へり、喜べや人の子等」の讚美歌も彼女の爲めに歌はれてゐるのであつた。彼女自身もそれを信じてゐる。彼にはさう思はれた。

儀式の途中で彼は外へ出た。伯母の家の年老いた料理人が彼を呼び止めて復活祭の接吻をした。一人の愛想の好い若い百姓が出て来て、「基督は復活し給へり」と云ひながら、一種特別な然し愉快な百姓の匂ひを浴せかけて、縮れた髻でちく／＼と頬を刺しながら、強く三度彼の唇を接吻した。その時老婢マトリヨーナとカチューシャが會堂から現れた。多くの人の頭越しにネフリユードとカチューシ

ヤは輝く顔を見交はした。

彼女は入口で乞食に施し物をした。その上汚い乞食に近寄り、少しも厭ふ色もなく喜びの眼を輝かせて三度その乞食に接吻した。「わたしのしてゐることは良いことでせうか？」さうしてゐる間にも、彼女は訊ねるやうにネフリユードの眼にぞつと自分の眼を向けるのだつた。「さうだ、良いことだとも、すべて良いことだ何もかも美しい。本當にお前は實に可愛い、女だ」と彼は眼で答へた。

彼女達が階段を降りると、ネフリユードは其方へ歩み寄つた。少しも早く彼女の傍へ行きたかつたからである。マトリヨーナは頭を下げた。「基督は復活し給へり」それからハンケチで唇を拭いて、それを彼の方へ突き出した。

「寔に基督は復活し給へり」と彼は答へて老婢に接吻した。そして彼はカチューシャを見た。彼女は眞赤に顔を染めて近づいた。

『基督は復活し給へりドミートリイ様』

『寔に基督は復活り給へり』

二人は二度接吻してちよつと躊躇つたが、思ひ切つて三度目の接吻をしてにっこり笑つた。

『お前は牧師さんの所へ行かないのかい？』

『いゝえ、暫くわたし此處で休んでゐますの』彼女は何か嬉しい仕事でも爲果せたかのやうに力を籠めて云つて、深い溜息を吐いた。ネフリユードを見詰めたそのほんの少し斜視の眼には、熱情と童貞と戀愛の色が溢れてゐた。

男女の戀愛で必ず一度は達する頂點——その瞬間には、意識もなく、道理もなく、何等の肉感的なものも混らないものである。それがこの復活祭の晩にネフリユードにもやつて来た。

あゝ、若しもネフリユードの戀が其處で止つてゐたならば！

六

教會から歸ると、ネフリユードは早速精進を破つて、軍隊ですつかり癖になつたブランデーを一杯と葡萄酒を幾杯か飲み、部屋へ行くや否や、着たまゝ寢込んで了つた。

コツ／＼と戸を叩く音がした。

『カチューシャかい、お入り』と彼は起き上つて云つた。

『御飯でございます』

にこ／＼として彼女は入つて来た。まだ復活祭の美しい着物を着てゐたが、髪飾りだけはもうなかつた。

『今行くよ』と彼は立ち上つて櫛を取りながら答へた。カチューシャはまだ其處にゐた。それを見ると彼はつか／＼と彼女の方へ歩み寄つた。途端に彼女は身を

返して逃げ出した。

『ちえつ、何故掴へなかつたのだらう』

それから彼は駈け出して追いついた。彼女を何うしようといふのかは自分でも解らなかつた。

『カチューシャお待ち』と彼は云つた。

『何か御用でございますの』

『用事は別にないが……』彼はどぎまぎして、一般の人のしさうなことを思ひ出して彼女の腰に手を廻した。彼女はちつと男の眼を見入つた。

『およし遊ばせ、若様』彼女は眞赤になり涙を浮べて男の手を力任せに押し退けた。ネフリユードは狼狽して一瞬間自分を恥づかしく思つた。この時彼は本當に自分を信じて、この狼狽と羞耻とが、眞實な彼の靈魂の要求によつて、彼女を離したのだと知るべきだつた。が彼は單にそれを自分の迂濶からだとはばかり考へ、

再び彼女に追いついてその襟首に接吻した。これは以前ライラックの茂みの蔭で無心にした接吻とは大分異つてゐた。また今朝教會でした接吻とも大變異つてゐた。これは怖ろしい接吻だつた。

『まあ、何をなさいますの！』彼女は怒りと悲しみの聲で叫びながら走り去つた。食事が終つてからも彼はまだ昂奮してゐた。つひ今朝方まで残つてゐた精神のなものもすつかり消え去つて、今はたい憎むべき醜い動物的本能だけが、彼の全體を支配してゐた。

夕方、カチューシャは泊り客の寢床を拵へる爲めに、ネフリユードの隣室へ行かねばならなかつた。彼女が入るのを聞きつけると、彼は足音を忍ばせてそのあとをつけた。

ふと彼女は振り向いて彼を見出すにつこりした。がそれは以前のやうに幸福な微笑ではなく、恐れるやうな、憐みを乞ふやうな微笑であつた。極く僅かだが

残つてゐた最後の良心が叫く眞實の戀愛の聲と、「うつかりするな、お前の幸福、お前の歡樂の機會を逃がすな」と告げる悪魔の聲とが、一瞬間彼の中で争つた。そして第二の聲が遂に第一の叫びに勝つて了つた。

彼は彼女を抱きかゝへて寢床の上へ腰かけさせた。

『若様、ごうぞ行かして下さいまし』彼女は泣くやうにして云つた。『マトリヨナが参ります』成程誰か戸口に人の氣配がした。

『では夜になつてお前の所へ行くよ』と彼は囁いた。『お前一人だらうね』

『まあ、そんなこと！ いけませんわ、いけませんわ』と彼女は口の中で云つた。がわななく震へてゐるその身振りは、何かそれとは別な事を語つてゐた。

マトリヨナが入つて來たので彼は黙つて其處を出た。がこの淺ましい獸慾は殆んど狂暴に近かつた。彼はカチューシャの一人になる時のみをつけ狙つてゐたが、彼女は彼を避けるやうにしてゐた。マトリヨナの眼は嚴重に彼女に注がれ

てゐる。

闇の深い夜が更けた。ネフリユードはまた玄關の方へ出て行つた。春の夜の白い靄が殘雪の上を罩めて、近くの河では氷の破れる音が聞えた。彼は階段を降りて雪の中の水溜りを飛び越え／＼して女中部屋の窓の下へ行つた。小さなランプの光りの中に、カチューシャが唯一人物思はし氣に卓に向つてゐた。その可憐な姿は彼の心を打つた。が妙なことには、可哀さうに思へば思ふ程、彼の慾望は烈しくなるのだつた。

彼はコト／＼と窓を叩いた。カチューシャは身を震はせながら窓硝子へ顔を押し當て、外を透かして見た。その顔は彼がこれまでに見たこのない程沈痛なものだつた。庭へ出るやうに手招きしたが彼女は窓際を動かなかつた。その時戸口で誰か呼んだらしく彼女は姿を消した。深い靄の中を咽び泣くやうに氷の破れる音が絶えず聞えて來る。突然近くで、鶏が鳴いた。續いて彼方此方で鳴き出した。

二番鶏である。がそれらの聲の他はまだ四邊はひつそりとしてゐた。

暫くそこらを歩いてから彼は再び窓下へ來た。彼女は尙一人でしよんぼりと卓に向つてゐたが、その時ふと顔を上げた。彼はコッ／＼と叫いた。やがて外側の戸が開く音がしたので彼は玄関傍の所へ行つた。そこで二人は無言でしつかりと抱き合つた。彼女は燃えるやうな男の接吻を唇で受けた。突然マトリヨーナの腹立ち聲がした。『カチューシャ！』

彼女は慌てゝ入つて行つた。一旦は部屋へ戻つたが、ネフリユードはどうしても眠れないので、また起き上つて素足のまゝ廊下傳ひにマトリヨーナの隣りのカチューシャの部屋の戸口へ來た。まだ眼を覺ましてゐるらしく、彼女の寢息は聞えない。彼は小聲で呼んだ。

『カチューシャ』

すると彼女は跳ね起きて怒るやうに云つた。

『どうなさるおつもりなの、いけませんわ、伯母様に聞えますよ』

だが全體の調子は、『お任せしますわ』と云つてるやうに彼には思へた。

『開けて呉れ、ちよつとでいゝから、お願いだ』

彼女は黙つてゐた。がやがて鍵を外す音がした。戸が開くと彼はつと部屋へ入つて矢庭に、下着一枚になつてゐるカチューシャの露はな腕を捕へて抱き上げるど、そのまゝ外へ連出した。

『あれ、どう遊ばすの？』と彼女が小さな聲で云ふのには構はず、ネフリユードは彼女を自分の部屋へ抱き込んだ。

『いけません、いけません、お放し下さいつてば』と云ひながら、カチューシャはなほ確りとネフリユードにしがみついた。

x

x

x

x

暫くして、カチユーシヤは何を云はれても返事もしないで、わななく震へながらネフリユードの部屋を去つた。彼は再び玄關へ出て、其處に立つたまゝ、自分のした事を考へた。

夜が明けかゝつてゐた。近くの河の氷の破れる響きは益々繁く、今は水音も聞えた。漸く薄らいだ霧の中から朧な下弦の月がのぞいてゐた。

『一體どうなつたといふのだ。仕合せになるのか、ひどい目に合ふのか』

ネフリユードは自問した。『誰にでもあることだ。誰でもやることだ』さう獨り言した彼は、それから寢床へ行つて眠りに就いた。

翌日、快活で美男の友人センボツクが電報によつてこの家を訪れた。

『成程君がこの家に一週間もゐなくなつた理由が解つた』と友人はカチユーシヤを見た時云つた。『僕だつて捨てちや置かないよ』

出立の時、ネフリユードは、彼を見ると眞赤になつて行き過ぎようとしたカチ

ユーシヤを食堂の入口で呼び止めた。

『いよ／＼お別れだ』と百ルーブリの紙幣を入れた状袋を彼女に差し出しながら云つた。『さあ——』

カチユーシヤはその意味を悟ると首を振つてその手を拂ひ退けた。

『取つて呉れ、是非』と彼は無理に彼女のエプロンの衣兜へ捻ぢ込んだ。然し部屋に返つて昨夜の事を考へると流石に心は苦しかった。

七

戦争が濟んでから一度、カチユーシヤに會ひたさに彼は伯母の家を訪ねた。だが彼女はもうゐなかつた。噂によると、何處かでお産をしてから全く墮落して了つたといふ伯母達の話に、彼はぎくりとした。最初はカチユーシヤと子供を探さうとも思つたが、それは彼の良心を苦しめるばかりだつたので、わざとその記憶

から遠去かるやうにした。

所が、今思はぬ事件に出會つて、彼は十年前の罪惡を新しく身に感じた。そしてカチューシャ自身か、またはその辯護士によつて、衆人の前にその罪惡を暴露されはしまいかと彼はいたく恐れたのである。

ネフリユードは陪審員の控室の窓際で、不安氣に人々の話に耳を傾けながら煙草を煙らしてゐた。

再び開廷になつて、證人の審問が始まつた。それは、ネフリユードが「早く濟んで呉れ、ばい、な」と思つたにも拘らず、意外にも長くかゝつた。證據物件の取調べや、檢死報告書の朗讀、それから檢事の論告と辯護士の辯論、最後に被告達の陳述。

裁判長がマスロワに向つて、何か辯解することはないかと訊いた時、彼女は頭を垂れてわつと泣き出した。これを眺めると流石にネフリユードも涙に咽ばずに

はゐられなかつた。隣席の紳商が審し氣に『どうなさつたのですか』と尋ねた。けれどネフリユード自身にも解らなかつた。やつと咽び泣きだけは堪えたが、この時も矢張り、昔の自分の不行跡が法廷であばかれたらといふ怖れが、折角起りかけた彼の内心の反省を鈍らして了つた。

陪審員の審議が會議室で開かれた。彼等は各自々分勝手な説を吐き出した。カルチンキンは毒殺にも竊盜にも關係したとして有罪に、ポーチコワは竊盜罪としてのみ問はれることに一致した。マスロワに關しては烈しい議論が起つた。結局彼女は金を盗む意志はなかつた。たゞカルチンキン等に利用されたのだ。毒殺に就いても、彼女は單に睡眠劑とのみ信じてそれを飲ましたので、決して殺害の意志はなかつたといふことに決定した。だがいよいよ答辯書を作製するに當つて議論で頭の混亂した彼等は、マスロワが藥を與へたことだけを記し、肝心の「毒殺する意志なく」といふ但し書を附加することを忘れて了つた。

裁判長は答辯書を見て驚いた。それによれば、マスロワは何の理由もなしに客を毒殺したことになつてゐる！最初から彼女の有罪を主張してゐた副検事は、それによつて彼女を西比利亚へ流刑に處すべきものだと言明した。陪審官達も自分等の手落に氣付いて驚いた。がもう遅い。裁判長はポーチコワは禁錮三年、カルチンキンは徒刑八年、マスロワは徒刑四年といふ宣告を下した。

「冤罪です、冤罪です」それを聞くにマスロワは顔を眞赤にして叫んだ。「あんまりです、罪もない者を！私がそんなことをしたなんて！」彼女は泣き崩れた。

「これはこの儘には置いとけない」

ネフリユードは獨語した。そして彼女の後を追つて廊下へ出た。が人々の混雜の爲め、名を呼んだけれど彼女には聞えなかつたらしく、尙しやくり上げながら彼女は姿を消して了つた。仕方なしに彼は引き返して裁判長に會はうとした。控所^{じよ}でやつと彼は裁判長に追ひついた。

「ちよつとお話したいことがあるんです」

ネフリユードを見ると裁判長はその手を握つて云つた。「何か御用ですか？」

「マスロワに関する答辯書に間違ひがあるのです。彼女には毒殺の罪なんかないのです。」

「法廷は貴君方陪審員の裁決に従つたのです」

「然しこの間違ひは修正出来ましますまいか？」

「控訴の理由は十分あります。辯護士に御相談なさつたらいいでせう」
彼等は氣持の好い明るい戸外へ出た。

「ごうも妙な具合になつたものですね。放免かほんの少しの收監位なもので、西比利亚なんかへやられる筈はないのだつたが」

「全くあの但し書を抜かしたのは大失策でした」

「そこが最も大事な所なんです」と云つて裁判長は懐中時計を出して見た。待ち

構へてゐた情婦と會ふ時間までに四十五分しかない。彼は辻馬車を呼んで叫んだ
 『ヅヴォリヤンスカヤまで三十コペイカ、それ以上はやらないよ。ではネフリユ
 ード公爵……』

八

『本當に思ひがけない出來事だが、とにかく彼女の運命を出來るだけ早く救つて
 やらねばならぬ』

ネフリユードは再び裁判所へ引き返した。丁度出合ひ頭に今尋ねようとしてゐ
 た有名な辯護士フアナリーソンに會つた。辯護士は彼の顔も名前も知つてゐたので
 喜んで直ぐに彼をひとつの部屋へ案内した。そこで彼は要件を詳しく話した。

辯護士はマシロワの辯護を快諾したので、ネフリユードはほつとして町へ出た
 晴れ渡つた美しい日である。だがまたしてもカチューシャの顔や、過去の自分の

行爲なごが思ひ出されて憂鬱に囚れて行つた。「いや今は何も思ふまい」

彼はふとコルチャーギン家の晩餐會を思ひ出したので、通りかゝつた辻馬車に
 乗つた。十分後、彼はコルチャーギン家の玄関に着いた。

でつぶり肥つた立關番が彼を出迎へて云つた。

『皆様がお待ちでいらつしやいます』

ネフリユードは直ぐ食堂へ通つた。コルチャーギン家の人々は、夫人を除いて
 全部食卓に着いてゐた。二三の招待客の顔も見えた。

『これや丁度いゝ所だつた。さあお掛けなさい、今始めたばかりです』と老公爵
 は云ひながら、彼を令嬢の隣席へ坐らせようとした。この老公爵は曾て職に在つ
 た時、金持なので別に他人の歡心を買つてまで在職を願ふ必要がない爲め、理由
 もなしに人を笞刑に處したり絞罪に處したりした。ネフリユードはこの公爵を好
 かなかつた。彼は一同に握手をして廻つたが、それが何だか何時になく不快で馬

鹿々々しく思はれた。だが食事になると彼は急に空腹を感じて夢中で平げた。談話を交はしてゐる側から話しかけられても、彼は黙つてスープを啜つてゐた。

『まああの人は食べさしてお置きなさいまし』

ミツシーはいつもこんな風に、自分とネフリユードとは如何にも親密であるかのやうな物の云ひ方をするのだつた。『さぞお疲れでお腹がお空きでしたませうね』

『そんなでもありません。時に展覽會へは行きましたか』とネフリユードは云つた。

『いゝえ、あれは延ばしました。それでサラマートフさんの所でテニスをしましたの』

ネフリユードは苛立たしさを紛らす爲めに此處へ來たのだつたが、日頃から好きな萬事粹を盡くした此の家の贅澤や、人々の歡待まで、今日は何故か空々しく

て不快だつた。彼はミツシーに對して二つの見方を持つてゐた。或る時は、月の光りで見るとやうに彼女の美しい一面のみが眼に付き、或る時は、輝く日光の下で見るとやうに彼女の缺點のみが目立つた。今日はその後者だつた。

『お母さんの所へ行かない？』とミツシーがやがて彼に云つた。彼は生返事をしたが、他人の家へ來て他人に不快を與へるのはよくないと反省して、『公爵夫人さへ宜しければ』と答へた。

公爵夫人、ソフィヤ・ワシーリエウチは全身不隨だつた。一步も屋外へ出られなくなつてもう八年立つ。そして餘程身分のよい人達だけがその部屋へ迎へられた。ネフリユードは勿論夫人のお氣に入りで、彼の母がこの家族とは親密であつた上、ミツシーの婿にまで囑されてゐたので、この特別待遇を受ける一人だつた。

大きな客間まで來た時、ミツシーは突然立ち止つてきつとネフリユードの顔を

見詰めた。彼女は彼を好いてゐたので、どうでも彼を自分のものにしようとする（自分を彼のものにするのでなく）と思ひ込んでゐた。

『何か起つたんぢやありませんか？』と彼女は云つた。『仰しやつて下さいましな』

『え、或る事が起つたんです。實に意外な事でまた真面目な事です』と彼は正直に云つた。『然し今は何も尋ねないで下さい、これはよく考へた上でなければお話し出来ない事なのです』

『ではお話しして下さいさらないのですわね』と彼女は少し顔色を變へた。

『え、出来ません』

彼はきつぱりと答へたが、この言葉は彼自身に實際重大な何事か起つたことを告げた。

彼女は足早に彼の先に立つて歩み出した。彼は彼女が涙を隠してゐるのを察し

て、流石に氣の毒な氣がした。然し今自分が弱く出たら生涯彼女と結びつかねばならぬと思つたので、努めて口を利かぬやうにして、彼女の後に従つて公爵夫人の居間へ通つた。

夫人の傍には兼て夫人と種々の噂のある醫者がゐた。ネフリユードは厭な氣がした。ミッシーは彼を残して其處を出ながら云つた。『おあとで私の部屋へいらつしやいな』

『御機嫌よう』夫人は巧みな作り笑ひを浮べて云つた。『でもあなたは裁判所から大變ふさいでいらつしたさうですね』

『さうです』とネフリユードは答へた。『あゝいふ所へ行きますと、人は誰でも自分の不完全……人は人を裁く権利のないことを知ります』

『全くねえ』と例のお世辭上手な夫人は云つた。『時にあなた繪の方は如何？一度拜見に上らうと思つてますが、こんな體たものですから……』

『繪はすつかり止めました』とネフリユードは素氣なく答へた。夫人の空々しい世辭が今日は我慢のならない不快さで響いた。暫く雑談が續いた後、不機嫌なネフリユードの様子を見てゐた夫人は云ひ出した。

『それはさうと、ミツシーがあなたを待つてますよ。行つておやりなさいまし。グリーグの新曲をお聞かせしたがつてましたわ』

ネフリユードは立ち上つて夫人の手を握つた。

客間まで來ると彼はミツシーに出會つた。引き止められたが、彼はどうしても歸らねばならぬと云ひ張つた。別れ際に彼女はちつと彼の手を握りながらかう云つた。

『あなたにとつて大事なことなら、私にも大事ですわ。どうぞそれをお忘れないやうに……明日またいらして下さる？』

『さあ、どうですか』

そして彼は何故か羞恥に顔を赤くして其處を出た。

ミツシーと話してゐた間の抑へつけられるやうな不快さが容易に離れなかつた彼女と一緒にゐるなどは云ひ出した覺えもなし、公然の申し込みは勿論しない。表面だけでは彼には何等不正な事はないが、實際の心の中では、結婚しようと思ひ、暗に心を許してもゐたのだ。然し今ではもう何うあつても彼女と結婚することは出来ない。『實に恥づべき恐ろしいことだ。實に恐るべき恥づかしいことだ』と彼は歩きながら幾度となく繰り返した。これは唯ミツシーとの關係ばかりでなく、自分の今迄の行爲一切がみなさう思はれた。

『總てが恐ろしい恥づべきことばかりだ』と彼は我が家の玄関へ來た時かう呟いた。

部屋へ入つてからも彼は考へを續けた。『俺は自由にならねばならぬ、今迄のす

べての馬鹿氣た關係から。さうだ、自由に生きる爲めに外國へ行かう、羅馬へ。そして繪を描くのだ』然しふと自分の畫才の怪しいのに氣付いた。『何、唯自由に生きればいゝのだ。だがとにかくあの裁判一件を片付けて了はなくては』

突然黒い少し斜視の眼と、宣告を受けて叫び出した時の光景が浮び出したので彼は慌て、新しい煙草に火をつけると、部屋の中をあちこちと歩き出した。田舎の伯母の家での出来事が順々と思ひ出される……最後の晩の燃えるやうな情慾、それを満足させた後の慚愧、明け方の祭り、青い帯飾の白い衣服、續いてそれ以前の論文書きに行つてゐた頃のこと……

あの頃の彼と今の彼とは大變な相違があつた。それはあの晩の教會でのカチユーシャと、今朝法廷に立つた彼女との相違と略々似たやうなものだつた。昔は生一本な直情徑行を誇り、眞實を重んじたものだが、今は深い虚偽に——周圍の人達には却つて眞理であるかの如く認められてゐる最も恐るべき虚偽に陥つてゐる。

るのである。その泥沼から逃れる路はなかつた。例の貴族長の妻君との關係を絶つにはどうすべきか？ ミツシーから遠去かるには？ 土地私有を不正とする信念と廣大な土地を所有してゐることの矛盾を何うすればいゝのか？ カチユーシャに對して犯した罪は如何にしたら償ひ得るか？

あの朝、廊下でカチユーシャを呼び止めて、そのエプロンの衣兜に無理に金を捻ぢ込んだことが記憶に甦つた。その金で自分の罪は償はれたとでも考へたのか？

「おゝその金、淺ましいことだ。こんなことは破廉耻漢や卑怯者のすることだ。そして自分も矢張りそんな人間なのだ」彼は自分を尙も責め續ける。「貴族長の妻とその良人に對する俺の卑しい汚らはしい行爲、金錢に對する俺の態度、心には不正だと思ひながら、多くの富を私有してゐることはどうしたのだ。毎日々々のこの俺の怠惰な生活、あゝ世間を欺くことは出来ても自分を欺くことは出来ぬ」

すると突然、近頃周囲の人達に感じてゐた憎悪は、自分自身に對する憎悪であつたことが解つた。彼の生活には今迄屢々「靈魂の淨め」といふことがあつた。内生活が長い間の眠りから醒めて、新たにその活動を始める状態を云ふのである。然し直ぐそれは忘れられ、前より一層深い墮落へ落ちて行くのだつた。だが彼は今決然として叫んだ。「俺はミツシーにも眞實を打ち明けよう。カチューシャに對しては力の及ぶ限り彼女の運命を軽くする爲めに努力しよう。さうだ、子供のするやうに彼女に謝罪するんだ。何なら彼女と結婚してもいい」そこで言葉を切つて子供の時からし馴れてゐるやうに、胸に手を組み、眼を上げて誰かに呼びかけるやうに『神様どうぞ私を助けて下さい。教へて下さい。私の中へ入つて来て、汚れ果てたこの身を淨めて下さい』と祈つた。

彼の眼は涙で充たされた。がその涙には二つの意味があつた。即ちこの數年ずつと眠つてゐた精神の覺醒を喜ぶ善の涙と、これも皆自分の天性善なるによると

いふ自分に阿る惡の涙とである。

暑苦しくなつたので彼は窓を明けた。靜かな青白い月夜だ。彼は爽かな空気を胸一杯吸つた。彼は靈魂の淨められて行くのを感じた。

九

マスロフは重い疲労と、思ひがけない宣告を受けた落膽とで、がっかりして夕方六時にやつと檻房へ歸り着いた。この檻房へ收監されてゐるのは十五人で、その中三人は子供である。彼女が歸つた時はまだ明るかつたが、窃盜犯の肺病患者と、旅行券が無くて拘留された白痴の二人だけは臥てゐた。他の女囚は大方粗末な褐色の肌着ひとつで、窓の下を通る男囚を眺めてゐた。自分の連子に手を出したのを怒つて亭主を手斧で打ち殺した罪で、西比利亞行を宣告されてゐるコラブリョーワと云ふ老婆と、職務怠慢で禁錮に處せられた線路番の女房と、嫁入

り先きの亭主を嫌つて毒を飲ませようとして捕はれたヒョードシャといふ若い女——彼女は八ヶ月の保釋の間に亭主と仲直りして免訴の手續きさへしたが、矢張り西比利亞行になつてゐた。隣り合せにゐるマスロワを姉のやうに思つてゐる——この三人が裁縫してゐる他は、放火犯の老婆と、甥の入營を拒んで禁錮された四十位の女とが寢臺の上に坐つてゐた。その他尙四人の女が窓の所に立つてゐた髪の赤い皺唄れ聲でよく笑ふ窃盜犯と、「お洒落」といふ綽名の附いた放火窃盜犯の少女、贓品隠匿罪の妊婦、それから酒の密賣で檢舉された田舎女、彼女は七つと四つの子供を連れてゐた。私生兒を井戸へ投げ込んだ教會の執事の娘は、他の者には眼も呉れず、檻房内を往つたり來たりしてゐた。

マスロワは自分の床に上ると堪え切れなくなつて泣き出した。

『どんな具合だつたの?』とコラブリョーフが訊ねた。『だから確かな辯護士をお頼みつて云つたのに』

マスロワはしやくり上げながら小聲で云つた。

『お流しになつちやつたの』

『神様が恐くないのかね、罪もないこんな可愛い、娘を流し者にするなんて、何年だい』。

『四年』とマスロワは涙を流しながら答へた。線路番の女房が口を出して云つた。

『だけご今の世の中やそれが本當なのさ。眞の道なんてものはもうどうに犬が食つちまつて、今ちやてんで好きな事やつてるのさ』

『お前も悪い星に生れついたら見えるね』と放火犯の老婆が云つた。『乞食か牢屋は逃られつこなしさ』

『誰でも同じと見える』と酒密造の女が續ける。『何故密賣なんかしたつて? さうでもしなけれや乾上つちまふからね』

この言葉を聞くと、マスロワは頻りに酒が飲みたくなつた。

「ウォーツカを少しばかり」

「あいよ、上げようともさ」

コラブリョーワが内密で賣つてゐる酒を取りに行つてゐる間に、マスロワは寢臺の上で卷麵麩を食べ始めた。

「あなたにお茶を取つていたけど、もう冷めちやつたかも知れないわよ」とヒョードシヤは檻樓に包んだ錫の急須と猪口を棚から下ろして來た。酒が來るとマスロワは先づ一口飲んで「お洒落」さんにも勧めた。二三分経つと彼女はすつかり陽氣になつて、法廷の様子を話し出した。みんながうるさく彼女の顔をばかり見詰めてゐたことなどを元氣に語つた。その中にちよつとした事から、赤毛の女とコラブリョーワは取組合ひの喧嘩を始めた。この騒ぎは取締りと看守が來てやつと納まつたが、二人は尙暫くは口汚く罵り合つてゐた。

やがて皆寢床へ入つて、中にはもう甃を立てる者もあつた。マスロワは自分がもう重罪の宣告を受けた人間であると思へたが、どうしても諦める氣になれなかつた。隣りのコラブリョーワが彼女の方へ寢返りをして云つた。

「まあ心配しなさんな、西比利亞にだつて人は住んでるし、まさか死ぬやうなことはしないよ」

「でもきつと辛いわね」

「あゝ誰でも神様の思召には逆らはれない」とコラブリョーワは溜息を吐いた。

「まあ諦めが肝心だ。どうにもならないことだから」

十

翌朝ネフリユードは眼を醒ますと、何か自分の身の上によい事が起つて來るやうな氣がした。

「カチユーシャ、再審——。さうだ、かうしてはゐられない」

偶然にもこの朝、待ち兼ねてゐた貴族長の妻からの手紙が來た。すつかり手を切るから思ひのまゝ目出度く結婚して呉れと書いてあつた。

「結婚！現在ではそんなことは思ひもよらぬ」彼は冷やかに笑つた。然しミツシ一にすべてを打ち明けるといふ事も、實際になると中々容易な事ではなかつた。

「たゞあの家を斷じて訪ねないことにしよう。先方から訊ねて來たら、その時すつかり話してやればよい。だが監獄へは行かねばならぬ。許しを乞ふのだ。そして若し必要だつたら彼女と結婚しよう」それが彼にとつて今は唯一の救ひなのだ。財産の事に關しても、自分の信念の通り處理しようと決心した。そして先づ老婢のアグラフェーナに、もうこの邸も使用人も一切不用になつたと告げた。そして彼はその理由として、カチユーシャの事件をすつかり話した。

「とにかく彼女をあんなに墮落させた原因は俺なのだから、俺は全力を盡くして

彼女を救はねばならぬのだ」

『それは結構なお道樂でございますけれど、そんな過失はどなたにもあることでございますから』と老婢は事もなげに云ふだけだつた。

彼は辻馬車を雇つて裁判所へ赴いた。そしてその日の裁判が一應片附くと直ぐ検事を尋ねて、マスロワに面會さして呉れと頼み込んだ。彼は彼女との關係を話して、一緒に西比利亞へ行きたいことや、結婚をもちたいことなど述べた。検事は驚いてその無謀を諫めた。

検事から面會許可證を貰ふと彼はまた云ひ足した。『私は以後陪審員として出廷致し兼ねます。理由は、人を裁判することは無用なばかりでなく、却つて不道徳だと考へたからです』

ネフリユードは直ぐ未決檻へ行つたが、マスロワが其處にゐなかつたので遠い所にある假留置場まで行つた。然し時間がもう遅かつた爲め、到頭彼女に會ふ事

が出来ずに家へ歸らねばならなかつた。その日は長い間手に觸れなかつた日記を開いて、二三頁讀んでから次のやうに書き付けた。

「二年間日記を書かなかつた。つまらない兒戯だと思つたからだ。然し日記は兒戯ではない。心内にある神聖な眞我と自己との談話である。四月二十八日、陪審員として法廷に列した際、端なくも遭遇した一事件によつて私は覺醒した。昔私が誘惑したカチューシャが被告席にゐたのだ。そして妙な誤審から遂に流刑に處せられた。皆自分の罪である。自分はこの女に罪を懺悔し、罪を償ふ爲めには彼女と結婚してもいゝと決心した。神よ、お助け下さい。私の心は今全く平和だ。そして歡びに充ちてゐる」

十一

その夜、マスロフは眼が冴えて寢付かれないので、教會の執事の娘が往つたり

來たりしてゐる人口の方を見詰めながら、色々考へ込んでゐた。この後はどんな事があつても、サガレンの囚徒と結婚したりなどしまい。なるべく監獄の役人で、書記なり、看守なり、看守見習ひでもいゝから、そんな人達と一緒に暮さうと考へた。

「みんながそんな風になつて了ふんぢやないかしら、でも私だけは死んだつてそんな惨めなことになつてはならない」

それから受持の辯護士や裁判長までが自分の顔を見てゐたこと、面會に来て呉れた朋輩のベルタから聞かされた馴染客の傳言、先刻の喧嘩など——だが子供時代の事、娘時代の事は少しも思ひ出さうとはしなかつた、殊にネフリユードと戀に落ちた頃の事などは。思ひ出すにはそれは餘りに悲痛だつたからである。

彼女が最後に彼と會つた時、彼は軍服を着て頭の毛は短く刈り込んであつたが濃くて房々してゐた。然し今のネフリユードは頭が禿げ上つて鬚髯が伸びてゐた

彼女が今日法廷で彼に氣付かなかつたのは、そればかりでなく、てんで彼のことがなご考へてゐなかつたからだ。

あの晩——ネフリユードが出征軍からの歸路、時間がないから伯母の家へは廻れないと電報を打つて來たので、彼女は夜の二時に通過する彼の汽車を待つ爲め主人達を寢床へ就かせてから、料理番の娘マーシユカを連れ出し、古靴を穿き、肩掛を頭から被り、裾を端折つて停車場へと駈けつけた。生温い風のある秋の夜だった。大粒の雨が一しきり降つてはまた止んだ。馴染みの路だったがつひ踏み迷つて、やつと停車場へ駈け着けた時は、もう發車を知らせる第二のベルが鳴つてゐる所だった。慌て、プラットホームへ飛び込んだ彼女は直ぐ灯の洩れる一等車の窓に、友人と差し向ひでトランプをしてゐるネフリユードを見出した。途端に列車はがたりと一揺れして、除々と進行し始めた。彼女は車室を覗き込みながらそれにつれて歩き出した。彼女は駈け出した。雨に濡れたプラットホームの端

に來て、其處を走り降りた時危く轉ぼうとした。今度は線路に沿つて走つた。到頭背後にランプを點けた最後の車が通り越して了つた時、いつか彼女は機關車に水を供給する水槽の傍まで來てゐた。ひゆう／＼と吹きつける風に肩掛ははためき、裾は足にからみついた。肩掛が吹き飛ばされても彼女はまだ駈け續けた。

『カテリーナ、肩掛が飛んでよ』と彼女に追ひ付かうとしてゐた小娘は叫んだ。

『行つて了つた!』とカチューシャは振り返つて叫ぶと、地面へ坐つて泣き出した。

「あの人は立派な一等車の中で贅澤な椅子に坐つて、呑氣さうに酒なんか飲んでゐるのに、私は此處で泥にまみれ雨に叩かれて泣いてゐる」かう思ひながら泣いた。小娘は驚いてびしょ濡れのカチューシャに抱きついた。今度汽車が通つたら一思ひに死んで了はうかと彼女は考へたが、突然腹の子が微かに動いた。すると死なうといふ氣もすつかり無くなつて、彼女は力なく肩掛を拾つて起ち上つた。

その夜を堺として、カチューシャの魂の中には大きな變化が起つて、遂に今日のやうな境遇になつて了つたのだ。もう神や善をも信じなくなつた。一切が虚偽と邪惡だつた。それから後の事は事毎に彼女のこの確信を強めさせて行くばかりだつた。信仰深いネリフェードの伯母達さへ、今迄通り働けなくなると彼女を追ひ出して了つた。彼女の知る女と云ふ女は、皆彼女を金儲けの道具に使ひ、男と云ふ男は悉く彼女を快樂の目的物と考へた。

人は誰でも自分の快樂の爲めに生きてゐるのであつて、神と正義とかに就いての説は、皆虚偽である。彼女には信じないではゐられなかつた。稀に憂鬱や悲哀に襲はれた時には、煙草か酒、或ひは誰か男に夢中になつて、何もかも一切を忘れて了へばよかつた。

十二

次の日は日曜日だつた。ネフリユードは早朝に家を出た。彼が監獄へ着いた時には、囚人達は禮拜の最中だつた。彼は多くの面會人の群から離れて立つてゐた。面會を許す時刻が來ると人々は慌たしく動き出した。彼は一番後から面會室へ入つて行つたが、扉を開けると一時にわつと耳も聳せんばかりの數百の聲が響いて來たので吃驚して了つた。見ると其處に集つたすべての者は、まるで砂糖に集る蠅のやうに、この部屋を區分してゐる二重の金網にびたりと喰付いてゐるのだ。一方の側が囚人、一方の側は面會人なのだ。二重の金網の間は七八尺もあるのだ。妻、良人、父母、子供などが、互ひによく判るやうに話をする爲めには大きな聲で叫ばねばならないのだ。ネフリユードは、自分もこんな状態で話さねばならぬのかと思ふと、こんな状態を造り、且つこれを強ひる人々に對する反感が起つて來た。そしてつくづく自分の力の足りないこと、世間と相容れないことを思つて、妙な寂しさを感じながら五分間ばかり其處に立つてゐる中に、一種不

思議な道徳的な感覺にふらくと眩暈がするのを覺えた。

女囚の面會室はその先にあつたが、男囚の室より少し手狭なものと、看守が女である他に變りはなかつた。ネフリユードは後の窓際に立つてゐるマ스로ワを見出すと、烈しく胸が鳴つて息が詰まりさうになつた。愈々絶體絶命の時である。彼女は今日は獄衣でなしに、腰のあたりを帯で確り締め、胸を一杯ふくらました白い衣服を着てゐた。そしてハンケチの下から、眞黒な縮れた前髪を覗かせてゐた。彼女は朋輩のベルタを待つてゐるのだ。

「あなたは誰に面會なさるんですか」と女看守はネフリユードの傍へ來て訊ねた

「カテリーナ・マ스로ワ」と彼はもぢくしながら答へた。

「カテリーナ・マ스로ワ、面會人だよ」と女看守は叫んだ。

マ스로ワはいそくと金網の傍へ寄つて來たが、怪しむやうにちつと彼の顔を見詰めて佇んだ。然しその服裝から彼が金持であるのを見て取つたので、彼女は

斜視の眼でにつこりした。

「私に會ひたいと仰しやるのは貴方ですの」

「私、私が會ひたいのだ。私は本當に會ひたかつた。私は……」彼の聲は低かつた。

「馬鹿を云ふない」隣りに立つてゐるごろつきが叫んだ。「取つたのか、取らねえのか」

「ひどく弱つて、死にかゝつてゐるんですよ」と彼方で誰か他の者が叫んでゐる。マ스로ワは何を云はれたのか解らなかつたが、相手の物を云つた顔の表情は、彼女がこれまで思ひ出すまいとしてゐた或る事をふと思ひ出させた。深い苦悶が彼女の微笑を奪つた。

「何を仰しやつてるのか解りません」と彼女は更に眉を擡めながら云つた。

「會ひに來たのだ……」さうだ、俺は今自分の義務を果してゐるのだ、懺悔して

ゐるのだと思ふと涙が込み上げて来た。彼は両手でしつかりと金網を掴んで、涙を落すまいとした。マ스로ワはやつと男が誰であつたかに気が付いたのである。

『あなたはあの……いゝえ、私どなただか思ひ出せませんのよ』彼女は彼の方を見ないでかう叫んだ。彼女の顔は次第に曇つて行つた。

『私はお前に許して貰ひに来たのだ』

かう云ひ終ると、何だかどぎまぎして彼は四邊を見廻した。然し直ぐ、自分か耻を感じるのは當然のことであると思ひ返した。

『何うか許して呉れ。私はお前の身を取り返しのつかないやうに誤らして了つた』

マ스로ワは斜視の眼を大きく見開いてゐた。彼は堪らなくなつて金網を離れたそして込み上げて来る歎息を抑へようとした。ネフリユードを面會所へ案内させて、それに興味を唆られたらしい典獄と士官が其處へ入つて来て、彼が金網の傍

にゐないのを見ると、何故女囚と話をしないのかと訊ねた。彼は鼻をかんで身震ひをし、それから静かな落着いた聲で云つた。

『この金網が邪魔になつて聞えませんが』

典獄はちよつと考へてから、『では少しの間なら、此處へ呼び出しても構ひません』と云つた。

やがて横あひの戸口から出て来たマ스로ワは、彼の傍まで来ると立ち止つて、眉の下から彼を見上げた。二人は傍の腰掛へ並んで坐つた。

『勘辨し難いのは解つてゐる。過去の事はもう何にも出来ないけれど、これから事は出来る限りしようと思ふ……』

涙が溢れて来たので口を噤んだ。

『どうして私を見付けなさいました』と彼女は彼の言葉には答へないで、何となくに云つた。

「お、神よ、何うすればいいのかお教へ下さい」と彼は心の中で呟いた。

「私は一昨日陪審員として出てゐたのだ。お前は氣が付かなかつたかい？」

「え、少しも。お顔も見ませんでした」

「お前には子供があつたんぢやなかつたかい？」聞きながらも彼の顔は赤くなつた。

「え、でも幸ひに直ぐ死んで了ひました」とマスロワは外方を向いて素氣なく

答へた。「あの時は私もう少しで死にさうでした」

「伯母達は何うしてお前に暇を出したのだ」

「誰だつてお腹の大きい奉公人なんか置いときはしないでせう。でもそんなことはもう話す必要はありませんわ。何もかも私はすっかり忘れて了ひましたの。みんな濟んで了つた事ですもの」

マスロワは二度と再びネフリユードに邂逅はうとは夢にも思はなかつた。彼女

は彼と知つた瞬間、思ひ出すまいと努めてゐたその記憶をもう思ひ出してゐたのだ。昔互ひに思ひ合つてゐた美しい青年から教へられた、あの不思議な情と義理の世界、次には思ひがけない男の無情、續いて來た長い、艱難……考へれば胸が張り裂けさうだつたので、彼女は全く彼を別な人間として見ようとした。この立派な紳士も矢張り彼女のやうな動物を要求する男の一人である。それを自分は如何に利用したらいいかと考へたのである。

「私西比利亞へやられるのよ」

「知つてる、そしてお前に罪が無いことも」

「罪ですつて……辯護士に頼めばどうにかなるさうですが、それには大變お金が必要ますわ」

「無論控訴すれば何とかなる。それで私はもう辯護士にその事を頼んで置いた。」

二人は黙つたが、やがて彼女は媚びるやうに笑ひながら、「それから私、お願い

があるのよ、若し何ならお金を少し……え、少しでい、のよ、十ルーブリ」
 『よしよし』と彼はごきまごきしながら紙入れを探した。「この女はもう死んでゐるのだ」とネフリユードは思った。「こんな女と何もしてはならない」と或る聲が彼に囁いた。「それはたゞお前の首へ石をつけるやうなものだ。お前が其處に持つてゐる金をみんな女にやつて、永久に手を切つて了ふ方がよくはないか？」
 然しその瞬間に、昨夜その出現を感じた神が再びそこに現れた。彼は今直ぐ一切を打ち明けて了はうと決心した。

『カチューシャ、私はお前に謝罪りに來たのだ。許して呉れるのかい？』

マスロワはそれには耳も借さず、典獄が彼方を向いた時、素早く手を伸ばすと紙幣を取つて帶の間へ隠して了つた。

『可笑しいのね、何を云つてらつしやるの』

彼は結婚のことを云ひ出さうとしたが、その時典獄が面會時間の切れたことを

告げた。

『私はまた來るよ。まだ色々話さねばならないことがあるから』

『ではまたいらつしやい。構はないことよ』

そしてお客にでも對するやうに彼女は愛想笑ひをした。

十三

面會する前までは、彼女が自分と會つて自分の心持を知つたら、どんなに感動して、再び昔のカチューシャに返るだらうと豫想してゐたのだが、今や彼の希望は全く裏切られた。最も彼を驚かせたのは、彼女が醜業婦としての境遇を少しも恥ぢてゐないことだつた。然しそれは當然の事かも知れぬ。誰だつて自分の職業が一番大切な善良なものと思はせるやうな人生觀を持つものだから。そしてその人生觀を保つ爲めに、同じ境遇の人々と結合する。世の富豪がその富強——強奪

を誇り、軍人が戦勝——殺人を鼻にかけ、貴族がその権力——壓制を自慢するのは盗賊、がその機敏を誇り、醜業婦がその自堕落を鼻にかけ、殺人者がその殘虐を自慢するのと同じ現象である。我々が前者——富豪や軍人や貴族の抱く人生觀を怪まないのは、唯彼等の造る社會がより大きく、我々もそれに屬してゐるからと云ふに過ぎない。

ネフリユードは辯護士から起訴狀を渡されると、また監獄へ出かけて行つた。

彼は廣間で長い間待たされた。然し典獄の親切で、今日は面會所でなく事務所で彼女に會ふことを許された。

『御機嫌よう』とマスロワはこの前とは打つて變つて、嬉しうに彼の手を強く握つた。

『今日は控訴狀に署名して貰ひに来た』と彼は彼女の様子に驚きながら云つた。

『これに署名してお呉れ、直ぐベテルブルグへ送るから』

彼女はにつこりして答へた。

『え、何でもしますわ、貴方の仰しやることなら』

ネフリユードは署名する場所を教へた。インキの中へペンを差し込みながら彼女は深い吐息をついて、それから自分の名を書いた。

『これでいゝんですか』

『うん、それから私は少しお前に話がある』

彼は女からペンを取りながら云つた。愈々決斷せねばならぬ時が來たのだ。

『私はお前と結婚しようと思つたのだよ』

『それは何うした譯？』とマスロワは恐怖の表情と怒つたやうな調子で云つた。

『さうするのが神様に對する私の義務だ』

『今頃神様もありませんわ。ごんな神様ですの？ 貴方はあの時神様をお知りにならなければならなかつた筈ですわ』

ネフリユードは女の息の酒臭いを知つた。

『まあよく氣を落着けなさい』

『氣を落着けろつて仰しやるの？私が酔つてると思つてらつしやるのね。酔つてますさ、だげど云つてゐることははつきりしてますわ』彼女は昂奮して續けた。『私は罪人で淫賣、貴方は紳士でしかも立派な公爵様。私なんかにかゝり合つて御身分を汚しなすることはしないでせう。立派なお姫様をお貰ひなさいまし。私に御用の節は十ルーブリ一枚で結構なんですから』

『お前には今の私の心の苦痛が解らないんだ』ネフリユードは身を震はして云つた。『お前に犯した罪を今ごんなに私が責めてゐるか……』

『罪を責める！』彼女は怒りの聲で云ひ返した。『あの時にはさう思ひにならなかつたわね。たゞ百ルーブリを押しつけて……あれは私への玉代ではありませんでしたか』

『決して忘れてはゐない。けれど今となつてはごうにもならないことだ。がこれからは決してお前を捨てない。これだけは誓ふ』

『だげど、私がもう厭ですわ』かう云つてマスロワは聲高に笑つた。

『カチューシャ！』

『お歸りなさい。私は罪人、貴方は公爵、こんな所に御用はない筈ですわ』彼女は取られた手を振りもぎつて叫んだ。

『散々人を玩具にして置いて、その上まだあの世の罪まで私をだしにして逃れようなんて！私にはもう貴方は大嫌ひさ、眼鏡を見ても癩に障る。そのぶく／＼肥つた汚い顔つたら、おゝ厭だ、お歸りなさい。お歸りなさいつたら』

看守が驚いて二人の傍へやつて來た。

『構はないで置いて下さい』とネフリユードが云つたので、看守は窓の所へ戻つた。

『お前は私を信じて呉れないのだね』

『結婚の話なら眞平です。……お、何故私はあの時死んで了はなかつたのだらう』

マスロワはかう云ふと突然、しくしくと泣き出して了つた。ネフリユードも涙が滲み出るのを覺えた。と看守がまたやつて来て時間の切れたことを告げた。

『よく考へて置いて呉れ。出来れば私はまた明日も来るから』

マスロワは返事も見向きもしないで、看守の後に跟いて部屋を出て行つた。

マスロワは檻房へ歸ると、仲間の女囚達が、彼女の面會人に就いて、一しきり噂し合ふのには答へもせず、ちつと寢臺に横たはつて、長い間空間を見詰めてゐた。日の暮れるまでさうしてゐた。

苦しい懊惱が魂の中へ喰ひ入つて來たのだ。ネフリユードの言葉から、あの恐ろしい過去の思ひ出がまた新しく甦つて來たのだ。然しその記憶を負つて生きて

行く事は到底彼女には不可能だつた。餘りにもそれは苦しかつた。で日が暮れると、彼女はまたウォーツカを買つて仲間の女囚達と一緒に飲んだ。

十四

次の朝早く眼醒めると、ネフリユードは昨日自分のした事を思ひ出してぞつとした。然し何處迄もこの事をやり通さねばならぬと、一層固い決心をした。それから監獄へ出かけて行つた。

『マスロワですか。今日は生憎なんですが』と典獄は彼を見ると云つた。

『何うしてヤす?』

『つまり貴方の過失ですよ』典獄は微笑しながら答へた。『公爵、あの女に金をおやりになつてはいけません。おやりになるのなら私が保管さして頂きます。あの女は酒を飲んだんです。ごうも獄内で酒を密賣する悪風が根絶出來ないんでして

ね。そしてあの女は今日非常に酔つ拂つて亂暴までしたんです』
 ネフリユードは溜息をついた。
 『で仕方なしに非常制裁で獨房へ入れました。そんな譯でどうも今日は生憎な
 です。』

翌日、ネフリユードはまたカチューシャに會ひに監獄へ行つた。

『御面會になつても宜しい』と典獄は云つた。『それからマスロワを病院の方へ移
 すことは、知事からもさう云つて參りましたし、院長も同意しましたから、お望
 み通りになります』

それは彼女の生活を少しでもよくしようといふ考へから、彼女を看護婦の手傳
 ひとして監獄病院へ移すことを、前々からネフリユードが運動してゐたことなの
 である。

マスロワはたつた一人で婦人面會室に待つてゐた。そしてネフリユードを見る

と伏目になつておづく口を切つた。

『許して下さいましな、ドミートリイ・イワノギツチ様。一昨日はあんなひど
 いことを申し上げまして』

『許すなんて、そんなこと何でもないよ』

『ですけど』と彼女は遮るやうに云つた。『貴方は早く私の事なんか、ら手をお引
 きにならなけやいけませんよ』

そして相手の顔にちつと注いだ眼には、或る惱みと焦燥が見られた。そこには
 まだ忘れられぬ昔の恨みもあるやうだが、他に何か立派な考へがあるやうにもネ
 フリユードには感じられた。

『カチューシャ、私は前に云つたことをもう一度云はなけやならない』彼は非常
 に眞面目な調子だつた。『どうか私と結婚して呉れ。お前が厭なら、承知する迄お
 前に跟いて何處まで、も行く』

『では御勝手になさいまし。私はもう何も申しません』と彼女は答へたが、その唇はわななく震へた。彼女が落着くのを待つてネフリユードは云つた。

『私はこれから田舎へ行つて、それからベテルブルグへ行くんだ。お前の……いや私達の事件を再審して貰ふ爲めに。お前の宣告はきつと取り消し出来るよ』

『ですが、取り消しが出来なくつても決して御心配なさいませぬ。今度の事がなかつたとしても、考へると色々な事で私がかうなるのは當然だと思ひますから』
彼女はかう云つてから涙を堪えやうとしてちつと唇を噛んだ。暫く沈黙が続いたら、それからあの病院へ行くことは何うなりましたでせう。行つても宜しいのでしたら、私もうお酒なんかちつとも飲みませぬわ』

『それは實に結構だ』

ネフリユードは彼女の眼を見入つた。二人は思はずにつこりした。

マスロワは面會を済まして檻房へ歸つて來ると、黙つて寢臺に腰かけて考へ込

んだ。

『どうしたの？あの人がか心變りをしたのだらう』とコラブリョーフが云つた。

『いゝえ、あの方ぢやないの、私の方が斷つたのよ』

『まあ、何て馬鹿だらう』

『あの方は、「お前が行く處へは何處迄もついて行く」つて云ふんだよ。そして直ぐベテルブルグへ裁判の片を附けに行くんだつて。だけど、何だつて同じことさ。私はもうあの人には用はないのだから……』

『それやさうだともね』とコラブリョーフは合槌を打つた。『一杯やらうぢやないか』

『お前さんお飲みよ』とマスロワは答へた。『私はもうお酒は飲まない事にしたの』

マスコワの再審は二週間内に開かれるらしかったので、ネフリユードはそれ迄にペテルブルグへ行つて、若し控訴が棄却されたら、更に陛下に上奏しようと思つた。それにマスコワ達囚徒の一隊は、六月初旬西比利亞へ護送されるかも知れなかつたので、最初の決心通り彼女の後を追ふとすれば、その準備として各領地を處分して置かねばならなかつた。彼は先づ彼の収入の大部分を供給してゐた、一番手近かなリジミンスキー村へ行つた。

土地の事や、百姓と地主との關係などは以前から知つてゐた。地主に對する百姓はまるで奴隷の有様であつた。まだ大學生の頃、彼はヘンリージョーヂ主義を主張して、父から相續した土地を百姓達に與へて了つたこともあつた。所がその後軍隊生活に入つて、浪費の習慣を覺えてからは、以前の主張は忘却して母から送つて來る土地の收益金を平氣で使つてゐた。けれど母の死後、その財産を自分で處理しなければならなくなると、再び土地私有に關して自分の態度を如何にす

べきかといふ問題が起つて來たのである。彼は廉い地代で土地を百姓達に貸しつけて、地主の關係なしに自由に耕作させようと決心した。

正午頃彼はクジミンスキー村へ着いた。村内を一巡して、夜は早く寢室へ入つた。先刻は迄こんなものを捨てるのは何でもないやうに思はれたが、今は、折角これ迄にした財産を失つて了ふのは、どうしても不心得なことだといふ考へが起つて來た。とにかく今夜は眠つて明朝新しい頭で考へ直さうと思つて、床へ就いたが、中々眠りつかれなかつた。爽かな空氣と冴え渡つた月光とが窓から流れ込んで、蛙の聲が頻りに聞えた。窓近いライラツクの茂みには夜鶯が鳴いてゐるふとマスコワが唇を震はして蛙の鳴くやうな聲で『どうか見捨て、下さい』と云つたのを思ひ出した。獨逸人の管理人が蛙の方へ行かうとするのを呼び返す途端その顔が忽ちマスコワの顔に變つて、『貴方は公爵様、私は罪人ですの』と云ひながら詰め寄つて來た。ネフリユードは眼が覺めた。

「一體自分のやらうとしてゐる事は良い事か悪い事か。自分には判らない。が何よりもまあ眠らなければならぬ。」

彼は深い眠りの中へ落ちて行つた。

眼か覺めると外はどんよりした雨催ひの日だつた。間もなくしめやかな小雨が落ちて来て、濕つぽい土の匂ひと一緒に、若葉の香りが窓から流れ込んだ。

昨日云ひ渡してあつたので、百姓達は朝からテニスコートに集つてゐた。彼が土地貸與のことを説明し、地代も他の村より遙かに廉い額で定めたにも拘らず、百姓達は彼の豫期してゐたやうな喜びの色を見せなかつた。彼は自ら飽足らない心を抱いて、次の村バノーヴオへ行つた。そこは初めて彼がカチューシャと會つた場所だつたので、土地の處分をすると同時に、カチューシャの事や、その子供の死亡の眞偽に就いても探つて見たく思つた。

伯母達の邸へ着いて何よりも驚かされたのは、その住居がひどく荒れ果てゝゐ

ることだつた。唯庭だけは昔のまゝで、丁度十二年前、彼とカチューシャが鬼ごつこをして隠れたライラックの茂みの中には、矢張り葛麻の花が一面に咲いてゐた。

和かな春風が新たに掘り起された土の香を運んで来た。川下の方からは、洗濯女達の布を打つ響きが流れて来た。水車場からは騒がしい水音が聞え、蛇はぶんぶん唸りながら慌しく飛んでゐた。

ネフリユードはふと昔まだ若く無邪氣だつた頃の事を思ひ出した。あの頃も矢張りざあ〜といふ水車場の水音や、砧の音などが聞えた。蛇はぶん〜と耳の端を掠めて飛んでゐた。が彼自身は最早や十九歳の青年ではない!

ネフリユードはマスロワの伯母のマトリョーナ・ハリーナを訪ねる爲めに出かけた。マトリョーナは、ネフリユードに云はれてやつと彼が誰であるかに氣付いた。

『まあ、旦那様で御座エましたアで。勿體ねえ、よく来て呉らつしやいました』
 彼女はきい／＼聲で續けた。『旦那様もお年を取られましたよ。美え若衆で御
 座らつしやつたが、それが今ぢやまあ！矢張り苦勞なかつたと見えますだ』
 『實はその苦勞の爲めに來たのだが』とネフリユードは靜かに云つた。『お前はカ
 チューシャ・マスロワを知つてらだらう』
 『カチューシャですかい。知つてます所か、あれはわしの姪で御座えますだもの
 あれの爲めにやわしやどれ程涙こぼしやしたか。旦那様、神様の前では誰も罪の
 ねえ者はありませんえだ。若え時には少つたあ悪戯あ誰でもしてゐるだ。でも旦那
 様はあの子に悪戯あなさつたからつちうて、百ルーブリてえ金をおやんなされ
 ましたで、帳消しになつてやすだ。所があればよくねえ女で、え、口見つけて世
 話してやつたが、その御主人と喧嘩して追ん出されましただ』
 『子供はどうしたい。この家でお産をしたといふことだつたが』

『子供ですか。子供は産後の肥立ち悪かつたで育兒院へやりましたよ』
 『すると育兒院の登録番號はあるかね』
 『へえ、番號は判つてやすが、赤ん坊はマラーニヤが連れて行くど直ぐ死んちま
 ひました』
 『マラーニヤつて誰だい』
 『長らくスコロドノエ村に住んでゐた産婆でしたが、それももう死にました
 だ』
 『それでその兒は好い兒だつたかい』
 『それはへえ、旦那様にそつくりな好い兒でした』
 『どうして病みついたのだい。食物でも悪かつたのかね』
 『食ひ物つて、食ひ物なんかほんのかこつけにしかありませんだ。自分の子でね
 えと仕方のねえもんで。丁度モスクワへ連れて行く途中で死んだと云ひました』

「いよ」

ネフリユードが自分の子供に就いて知り得たのはこれだけであつた。彼は歸途村を歩いて、持ち合せの五六十ルーブリの金をあちこちで恵んでやつた。

太陽は鮮かな滴るやうな縁に蔽はれた菩提樹の彼方に沈んで、ネフリユードが土地處分の方法を考へ耽つてゐる部屋の中には、もう蚊の群がぶん／＼と舞ひ出してゐた。牛の鳴き聲や門の扉の軋る音に混つて、今夜の會合に集つて來る百姓の聲が聞えて來た。

やがて彼は戶外へ出た。今迄がや／＼と云ひ合つてゐた百姓達は彼の姿を見ると急に黙つて了つた。彼は勇氣を出して、自分の土地を皆百姓に分配して了はうといふ計畫に就いて語り始めた。然し彼等は別段顔の表情を變へもしなかつた。彼等には彼の云ふ事が理解出來なかつたのだ。と云ふのは、彼等は、人間はすべ

て、殊に地主などといふ者は、自分の利益になることのみを計るものだと固く信じ切つてゐたからである、彼はヘンリージョージの關稅組織論を持ち出して説明した。

『この地球上の土地は皆人間の物ではない。神の物である。土地は人類共有のもので、誰もこれに對しては同等の權利を持つてゐる。では如何にしたら最も公平に土地を分ける事が出来るか。此處に一つの方法がある。肥えた土地を使用する者は、それを使用する事の出來なかつた者に對して、土地使用の代金を拂ふことにするのだ。所でその代金を、誰が誰に拂ふかといふ問題になると中々困難だが然しどの村でも共同費用の金は要るのだから、その土地使用の代金を共同費用に充てるやうにすればよい。つまり上等の土地を使用した者は村費を餘計出し、下等な土地を使用した者はそれを少し出せばよいのだ。村費はあまり高過ぎてでもないし、安過ぎてもない。あまり高くなると拂はれなくなつて却つて損だし

安過ぎると土地の所有權が賣買されるやうになつて、土地賣買で儲ける者が出て来る。だからそこをよく協議しなければならぬと思ふのだ』

『成程さうに違えねえ、ほんとうに道理でがんす』とやつと百姓達は合點が行つたので元氣を出して云つた。

パノーヴオ村滞在の最後の日、伯母の家に残つてゐる色々な道具を調べて見た。衣裳戸棚の抽き出しには澤山の手紙があつて、その中に一枚の寫眞が混つてゐたそれには死んだ二人の伯母と、學生時代の彼と、まだ無邪氣な可憐な生々としてゐた頃のカチューシャと一緒に寫つてゐた。彼は手紙と寫眞だけを取つて、あとの道具はみんな水車屋の男に賣拂つて了つた。

ネフリユードは、今は本當に重荷を下ろしたやうな限りない自由な喜びを感じた。

十六

田舎から歸つた翌朝、彼は監獄病院へマスロワを尋ねて行つた。彼女は小兒科病室で働いてゐた。

ネフリユードは若い醫員に彼女の評判はどんな風であるか訊ねた。

『評判はいゝんです。以前の自分を考へると感心によく働くと思ひますね、やあマスロワが來ましたよ』

年寄りの看護婦の後から、青い堅縞の服に白いエプロンを掛け、布片で頭髪を包んだマスロワが現れた。彼を見るとさつと顔を赤らめてちよつと躊躇つたが、やがて急いで彼の傍へ寄つて來た。そして一層赤くなりながら手を差し出した。

彼女の顔の表情には何か新しい或るものが現れてゐる。それがまたネフリユードには、何か敵意のあることを示してゐるやうにも思はれた。彼は近くベテルブ

「ルグへ行くことを告げた。そしてバノーヴォ村から持つて来た寫眞を封筒のまゝ手渡した。」

「バノーヴォ村でこれを見つけて来た。随分古い寫眞だよ」

「マシロワは濃い眉を上げ斜視の眼で怪しむやうに彼を見たが、無言の儘寫眞を受け取つて、エブロンエブロンの帯の間へ藏つた。」

「お前の伯母さんに會つて来たよ」とネフリユードは云つた。

「貴方がでございますか」と彼女は一向平氣の様子であつた。

「此處はいゝかい？」

「えゝ、ようございますよ」

「仕事しごとが面倒めんどうではないかい？」

「そんなでもありません。でもまだ馴れないものですからね」

「とにかく彼方にゐるよりはいいだらう」

「彼方よりつて、何處あつちですの？」と彼女はまた顔を赤らめて訊ねた。

「監獄かんごくのことさ」とネフリユードは早口に答へた。

「どうして此方こつちがいゝのですか」

「周圍しゅういの人間にんげんがいゝだらう。彼方よりは」

「でも監獄かんごくにだつていゝ人は澤山たくさんゐますよ」と彼女は云つた。

「私はこれからペテルブルグへ行くつもりだ。お前の再審さいしんも直ただき始はじまるだらうがどうか判決はんけつが取り消しになればよいが」

「取り消しにならなくても、私にとつては今いまはもう何もかも同じことですよ」

「何故なぜ同じだい？」

「それだつて」と云ひながら、彼女は何か物問ものまひた氣けにネフリユードをちらりと見上げた。

「どうしてだらう。私にはどうも解わからない。然しかし何方どこにしろ、私はお前に話はなした

決心は、是非とも實行しようと思つてゐるからね』

マ스로ワは視線を外らしたが、その頬は喜ばしさうに輝いてゐた。が彼女の云ふことはそれとはまるで違つてゐた。

『その事ならもう仰しやらないで下さいまし』

『お前によく解つて貰はうと思つて云ふのさ』

『もうすつかり仰しやつて了つたぢやありませんか。この上仰しやることはない筈です』と彼女は無理に微笑を抑へる風で云つた。

突然病室の方から、子供の泣き立てる聲が聞えて來た。

『あら、私を呼んでるやうですわ』彼女は氣遣はし氣に四邊を見廻した。

『ぢや、これでお別れしよう』と彼は云つた。

マ스로ワは差し出したネフリユードの手をわざと氣付かぬやうに、その儘急いで立ち去つた。

「何うしたのだらう？何か考へてるな。私を試さうといふのか、それともまだ本當に私を許せないのか」とネフリユードは心の中で自分に訊ねて見た。が少しも解らなかつた。唯彼女がすつかり變つて、その心中に非常な變化が起つてゐることだけは解つた。彼は非常に感動して深い喜びに昂奮した。

マ스로ワは一人になると、幾度となく封筒の中から寫眞を引き出しては飽かず眺め入つた。色褪せて黄色くなつた寫眞の面を見詰めてゐると、彼女は堪らないなつかしさを覺えた。わけても額のあたりに捲毛を縮らしたうら若い美しい自分の顔を見ると、昔が戀しくてならなかつた。その頃の幸福だつた自分が思ひ出され、やがてまたこれからもう一度ネフリユードと同じ楽しい夢が見られさうな氣がして來た。だがふと現存の自分の身の上と、それにつながる恐ろしい過去の生活が意識に甦つた。……それも皆あの人のお蔭だつたのだ！突然またネフリユードに對する以前の様々な怨恨が湧き起つた。罵つてやりたかつた。責め詰つてや

りたかつた。今日あの機会にもう一度昔のことを繰り返して、以前自分の體を自由にさせたやうに、今度は精神までも、自由にさせないぞと、何故きつぱりはねつけてやらなかつたらう。彼女は苦しくなつた。一杯でいゝ、こんな時酒が欲しいと思つた。これが監獄だつたら彼女は一旦誓つた禁酒を破つて了つたかも知れぬ。然し此處では助手の醫員に頼みでもしなければ、一滴の酒も手に入れることは出来ない。所でその助手の醫員といふのは、いつもマスコワに云ひ寄るので、散々これまで男には懲り抜いて來た彼女には、それが厭でならない所から、迂濶にその男に頼むことも出来なかつた。

彼女は部屋へ戻つて來ると、朋輩の言葉には耳もかかず、たゞ自分の荒み果てた生涯を考へて、長い間嘔り泣きに泣いてゐた。

十七

ペテルブルグへ着くと、ネフリユードは先づ叔母のエカテリーナ・チャールスカヤ夫人の家に逗留することにした。今では全く自分と没交渉になつてゐる貴族社會の中に入つて行くのは、實に不快であつたけれど、これから彼が奔走せねばならぬ事件は、勢力ある人とはかり交渉してゐる叔母の力を、どうしても借りねばならなかつたからである。

『お前の噂はちよい／＼聞いたが、何うしたと云ふのだい。何か妙なことをお始めだつて云ふけれど』

ネフリユードが着いて間もなく、彼に珈琲を持つて來ながら、叔母のチャールスカヤが云つた。『ホワード(有名な監獄改革者)を氣取つて、監獄を見廻つたり、罪人を助けたりして、監獄の改良をするつもりださうぢやないか』

『冗談です。そんな氣はありませんよ』

『何故さ、良い事ぢやないか。だれぞそれには少々ロマンチックなお話がありさ』

うだがそれをお聞かせ』

ネフリユードはマスロワとの關係をすつかり打ち明けて話した。

『さう云へば、お前のお母さんからそんな話を聞いたことがあつたよ。それでその女は今でも美しいの？』

ネフリユードはこの叔母が好きで、その前に出るとまるで子供のやうになるのだつた。

『いゝえ、叔母さん、もうそんな浮氣めいた事は過ぎ去つて了ひました。たゞ罪もないのに刑の宣告を受けてゐるのが可哀想ですから、それを助けてやらうと思ふのです。それが私の義務です。原因は皆私なんですからね』

『だつて、お前はその女と結婚する氣だつて話ぢやないか』

『さうです、私はそのつもりなんです。だがその女が承知しません』

叔母は呆れ返つたやうな顔をしたが、直ぐ顔色を和けて云つた。

『さうかい、ぢやその女の方がお前より餘程伶俐だね。そしてお前、ほんとにその女と結婚する氣なのかえ？』

『本當にその氣です』

『あんな墮落生活をして來た者とかえ？』

『それも皆私が原因ですもの』

『まあ、驚いたお坊ちゃんだね、お前は』と叔母は吹き出したいのを堪えて、『だげごお前のそのお坊ちゃんの所が私は好きなのさ』と確かにそれを喜ぶかのやうに彼女は幾度も云つた。

『私がかうして出て來たのは、叔母さんに折り入つてお願ひしたいことがあつたからです。それは、その女は西比利亚へ流刑の宣告を受けてゐるのです。で私は控訴の手續きをしに出て來たのです』

『何處へ控訴するのだい』

『元老院へです』

『お、元老院へかい、あそこなら従弟のリョフがあるけど、とにかく良人にさう云つて上げよう。良人は皆知り合ひなんだから。元老院ばかりでなく、色々な方面にお知己があるからね。私からもお願ひするが、詳しい事はお前からお話なささい』

やがてチャールスカヤ夫人の良人の、前の國務大臣だつた將軍が部屋に入つて来た。そしてネフリユードを見ると云つた。

『やあ、ドミートリイ、御機嫌よう』

それから尊大な風で、ネフリユードの話聞き終ると、彼は紹介状を二通書いてやらうと云つた。その一通は元老院控訴部の議官ウオーリフへ宛てたものだつた。

『色々な事を云はれてゐる男だが、然し立派な人物だ』と彼は云つた『俺には恩

があるから出来るだけ盡力して呉れるだらう』

他の一通は請願委員の有力者に宛てたものであつた。

ネフリユードは外へ出た。

最初、或る用件の爲めに、叔母から紹介されたチエルギアンスキー夫人マリエツトを訪れた。彼女は彼の幼馴染だつた。貧乏貴族の娘で、餘り評判のよくない或る男と結婚したが、その男は不思議にもすん／＼出世して行つた。ネフリユードは自分の尊敬しない人間に何か頼まねばならぬことを、平常から非常に辛いことにしてゐた。自分はもうその仲間からは抜けてゐるつもりでも、まだ彼等からは仲間の一人だと考へられてゐることを思ふと、彼は多年染み込んだ習慣の中へ再び入り込んで、我知らずその愚かな輕薄な空氣の中へ巻き込まれるやうな氣がした。それはもう叔母の家でも感じたことで、眞面目な事を語りながら、いつかふざけるやうな調子になつてゐるのであつた。久し振りでこのベテルブルグは、何

かにつけて、その都會的肉感的な刺戟で彼を誘惑した。

マリエットは丁度外出する所だった。彼女は盛装して玄關を降りて来たが、ネフリユードを見付けると、被つてゐたヴェールを上げて、輝くばかりの微笑をその頬に浮べた。

『まあ、ドミートリイ・イワノギツチ公爵！』と彼女は優しく嬉し気に云つた。

『覚えてゐますよ』

『名前まで覚えてゐて下さつたのですか』

『覚えてますとも！だつて私も妹もあなたを思つてゐたことがあつたんですもの』と彼女は佛蘭西語で云つた。『でも随分お變りになりましたわ。あゝ私生憎出かける所ですの』

『實はちよつとお願ひがあつて参つたんですが』

『ごんな御用ですの？』

『叔母からの手紙を持つて参りました。これに詳しく書いてあります』

『承知しました。出来るだけお世話いたしませう。ですけど今晚か明日か、また是非お出で下さいましな』

馬車に乗りながら、彼女は特有な魅惑的な微笑を含んだ眼で、ネフリユードを見た。

『たゞ御用の事はかしてなしにね』

ネフリユードは帽子を上げて會釋した。彼女を乗せた護謨輪の馬車は靜かに動き出した。

ネフリユードはマリエットの邸を出ると直ぐに元老院へ廻つた。其處でマスロワの控訴狀は既に受理されて、審理調査の爲めに、元老院の議官ウオーリフの手許へ廻されてゐるといふことを知つた。でネフリユードはその足でウオーリフの邸を訪れることにした。

ウォーリフはネフリユードを書齋へ通した。

『どうぞお掛け下さい。失禮ですが私は歩きながらお話しいたしますから』とネフリユードが渡した手紙を読み終ると彼は云つた。そして上衣のポケットへ手を入れて、秩序正しく飾り立てゝある大きな書齋の中を除かな足取りで、彼方此方と歩き出した。

『イワン・ミハイロギッチ伯爵から御依頼の件に就いては、及ばすながら御盡力いたします』

『實は』とネフリユードは云つた。『この事件はなるべく早く處理して頂きたいのです。その囚人がどうしても西比利亚へ送られねばならぬなら、いつそ早い方がいゝのですから』

『その囚人の名前は何と云ふのですか』

『マ스로ワと申します』

『承知しました。何とかしてこの事件は水曜日に開くことにしませう』

『では辯護士に電報を打つても宜いでせうか？』

『どうぞ御随意に』

『控訴の理由が不十分かも知れませんが』とネフリユードは云ひ足した。『然しこの事件に對する宣告は全くちよつとした行き違ひからなので、それは明かにする事が出来ようかと思ひます。』

『成程、然し元老院は、その原因に遡つて判決する譯には行きません』ウォーリフはきつと葉卷の灰を眺めた。『元老院はたゞ法律の適用が正確であるかないか、その解釋が正當であるかないかを考察するだけです』

『でもこれは例外な事件だと思ひます』

『如何にも！告訴人から見ると何んな事件も皆例外なんです』

ネフリユードは水曜日を約してウォーリフの許を辭した。

十八

次の日、ネフリユードが衣服を着更へてゐると、家従がモスクワから来た辯護士の名刺を持つて来た。辯護士は私用でペテルブルグへ来たのだが、その序でに、若しマスロワの裁判が直ぐ始まるやうなら、それに出席しようと思つて来たのである。

水曜日。ネフリユードと辯護士は澤山な馬車が並んでゐる元老院の大玄関で出会つた。案内を知つてゐる辯護士フアナリーンは扉を開けて中へ入つた。

やがてマスロワの事件の審議が始まつた。

ウオーリフは非常な勢ひで、控訴を取り上げる方へ賛成する理由を滔々と述べ立て、原判決を棄却すべしと論じた。

裁判長はフアナリーンに陳述を促した。彼は起立して、驚くべき正確さと、説

き伏せるやうな辯舌とで、法律の的確な意味を誤つた點を一々指摘し、論證し判決の不當なことにまで論及した。その辯論によつて、元老院は必ず前裁判の判決を取り消すに違ひないと思つた者もあつた。ネフリードは勿論訟訴の勝利を信じた。然し議官達の様子を見ると、微笑を浮べて勝ち誇つてゐるのは唯フアナリーン一人で、他の人達は微笑んでもゐなければ、勝ち誇つてゐる様子もなく、たゞもう飽々したと云ふ形で、寧ろ辯論の終つたのを喜んでゐるものゝやうであつた。

検事は控訴の理由が不完全で、原判決を取り消す點は絶対に認めないと、極めて明確に簡単に主張した。ウオーリフはそれを反駁した。が結局それも無駄な努力だつた。

かうして控訴は遂に不成立に終つた。

『恐るべき事だ』とネフリユードはフアナリーンと一緒に待合室の方へ出て行き

ながら云つた『あれ程明白な事件を、たゞ形式のみに重きを置いて棄却して了ふなんて!』

『この事件は既に刑事裁判所で失敗つてゐますからね』と辯護士は云つた。『この上は皇帝陛下に上奏する他ありません』。

ネフリユードの心は痛んだ。控訴が愈々棄却になつたとすると、マスロワは、罪なくして受けつゝある現在の苦痛を永久に続けなければならぬことになり、同時にまた彼女と運命を共にする自分の苦痛も、更に倍加されねばならぬのだ。

家へ歸ると、彼は一室へ閉ぢ籠つた。そこへ家従が入つて来て、伯爵夫人からお茶を飲みに来るやうにとの案内を通じた。

叔母の居間へ行きながら、ふと窓から戸外を見ると、見覚えのあるマリエットの馬車が玄關前にあつたので、彼は思はず胸の轟きと同時に、頬には微笑の浮ぶのを禁じ得なかつた。

マリエットは派手な服装をして帽子を冠つたまゝ、コツプを手にして美しい眼を輝かしながら、カテリーナを相手にしきりにお喋りをやつてゐた。

『御機嫌よう』と云つてからネフリユードは席に着いた。マリエットは彼の沈んだ様子を見て取ると、急に顔色ばかりでなく心持まで變へた。そしてあたかも自分の生活が物足らなくなつて、何かを探し求めてゐるやうな様子をした。これは全然自分の心にもないことを偽り装つたのではなく、實際いくらか物足なくて、それがネフリユードの今の心持とよく似てゐるやうに、彼女自身思つたからである。

ネフリユードは、マリエットの間ひに對して、元老院での敗訴の模様を語つたそれを聞くにマリエットは深い同情を表して云つた。

『まあ! 罪のないつて解つてつる人をね、ぞつとしますわ』

カテリーナは二人の會話の途切れるのを待つて、ネフリユードの方へ向つて口

を開いた。

『明晩はマーリン家へ、キゼウエツテルさんのお説教を是非聞きにお出でなさい』

短かい沈黙の後、マリエットはにつこり笑ひながら云つた。

『明晩は私佛蘭西芝居を見に行くつもりなんですの。あなたも是非御覧なさいな』
『何方を先にしたらいいんですか？芝居とお説教と』云つてネフリユードは微笑した。

『そんな揚足を取るもんぢやありませんわ』

『私の考へではお説教を先にして芝居を後にしないと、折角のお説教が面白くなくなりますからね』とネフリユードは云つた。

『いゝえ、矢張りお芝居へ先に行つて、その後で悔ひ改めをなさいました』

『まあ、そんなに茶化すもんぢやありません』とカテリーナが口を挟んだ。『お説

教はお説教、お芝居はお芝居です。人間は信心もしなければならぬし、また楽しみもしなければなりません』

『叔母さん、あなたのお説教の方が、他の誰のお説教よりもうまいやうですね』
家従が入つて来て來客を告げたので、カテリーナは部屋を出て行つた。

マリエットの表情はまた何となく愁はしげな色を帯びた。

『わたしは、兼ねて尊敬してゐる方の話を聞くと、自分の境涯が妙に情なくなつて堪らなくなりますの』

この言葉を云つた時、彼女は今にも泣き出しさうに見えた。この言葉の意味を解剖したら、勿論何のことだか判らない、どうせ取り止めのないものであるに相違なかつたけれど、この若い立派な装ひをした、そして人を惹きつける美しい眼を持った女の口から聞いた時、ネフリユードの耳には、それが何か特別に意味の深い立派な言葉でもあるやうに響いたのであつた。

『ではあなたは、御自分の生活を不満に思つていらつしやるのですね』
 『満足してゐなければならぬから、満足はしてゐますわ。だけどお腹の虫がいつも起つて参りますの』

『虫が起つたら、それを二度と眠らせてはいけません。それは我々が是非とも従はねばならぬ良心の聲なのですから』と、彼は遂に彼女の畏にかゝりながら云つた。

カテリーナが再び部屋へ入つて来た時分には、二人は單に幼馴染といふばかりでなく打ち解けてゐた。二人の間に交はされた會話は、權勢者に對する不満や、薄命な人達に對する同情であつたけれど、その言葉の調子や、眼の色は「あなたはわたしを愛して下さる？」愛してゐますとも！」と語り合つてゐたのだ。そして異性同志の感情が、無意識の間に鋭くなつて、いつか二人は互ひに身を摺り寄せてゐた。

歸り際にマリエットはまた觀劇のことを云ひ出した。

『明晩はきつといらつして下さい』と彼女は寶石の燦めく手に手袋をはめながら念を押した。

ネフリユードはそれを約束した。

寢室へ入つてからも彼は眠られぬまゝ、マスロワの事や、元老院の判決や、財産放棄の事などを思ひ耽つてゐた。すると突然「今度は何時お眼にかゝれるでせうと溜息をつきながら、ちらと流し目に彼が見たマリエットの顔が闇の中にありくと浮んで来た。

「西比利亞へ行かうとしてゐるのは、果して正しいことであらうか？自分の財産を放棄するのも正しい事であるかどうか？」

此等の疑問に何の答へも見出せない中に、ペテルブルグの夜は何時か白々と明け渡つて、雨戸から朝の光りが指し込んで来た。

彼はすつかり思ひ亂れてゐた。昨日迄の氣力も力強い決心も今や失はれかけてゐた。そして以前よくカルタに負けてぐつすり寢込んだ時と同じやうな、重苦しい眠りに落ちて行つた。

十九

眼が醒めてからネフリユードは、自分が何かしらひどい罪を犯したやうな感じがした。彼は色々考へ返して見た。別に何の罪も犯した覚えはない。然し確かに悪い考へは起した覚えがあつた。

彼は悪事を實際にした譯ではないが、その悪い行爲よりも一層悪い事——悪い行爲の源泉たる悪い考へを起してゐたのである。悪い行爲は繰り返さないやうにすることも出来るし、また悔ひ改める事も出来るが、然し悪い考へはすべての悪事を生み出すものである。悪い考へは否應なしに人を悪事の方へ導いて行くもの

である。

ネフリユードはその夜ベテルブルグを去るつもりであつたが、マリエットと劇場で會ふ約束だつたので立つ譯に行かなかつた。

「この誘惑に勝てるかどうか」と彼は冗談半分に自分に訊ねた。「これを最後の試みにして見よう」

劇場では丁度「椿姫」の二幕目で、外國人の女優が珍しい型で、肺病女の臨終の場を演じてゐる所だつた。

優雅で輕快で仇つばいマリエットは、胸開きの廣い衣服を着て、頸筋には小さな黒い點々を飾り付け、すつきりとした格好のいゝ撫で肩を露はにしてゐた。ネフリユードが案内されてその棧敷へ入つて來ると、彼女は振り向けた顔に意味有りげな微笑を浮べて、自分の後の椅子に着くやうにと扇で招いた。彼女の良人はいつもの落着き拂つた様子でネフリユードを見ると、軽く頭を下げた。

獨白が終ると劇場の中は拍手の音で湧き返つた。マリエットは衣摺れの音を立てながら立ち上つて来て、ネフリユードを良人の將軍に紹介した。挨拶が終ると直ぐ將軍は『私は失禮して煙草を吸つて來ますから』と云つて棧敷を出て行つた。何か話があるやうにマリエットは云つてゐたので、ネフリユードは待ち受けるやうな氣持で腰を下ろしてゐた。けれど彼女は劇の話ばかりを冗談交りに喋り散らしてゐた。

彼女が是非と云つて彼を誘つたのは、別に話があつた譯ではなく、唯、そのけばくしい夕化粧の美しさを見せたいばかりだつたのだと、ネフリユードは推察した。如何にもそれは美しかった。けれども不思議にまた、彼にはそれが何とも云へぬ厭な氣持がした。美しさの下にある醜さが解つたやうな氣がした。昨日話した色々の言葉も、自分を戀に落さう爲めの手段であつたことが解つた。

彼女の表面の美しさと、裏面の醜さが一緒になつて彼を恍惚とさせたり、厭は

しくさせたりした。彼は到頭思ひ切つて劇場を出て了つた。

ネヴスキー街を家の方へと歸つて行く途中、背の高いすらりとした、けばくしく粧し込んだ淫賣婦が、彼の前を歩いて行くのに眼が止つた。通りすがりにひよいとその顔を覗くと、彼女はにっこ笑つて、流し目に彼を見た。不思議なことに、その顔がマリエットを聯想させた。そして丁度劇場でマリエットに對して感じたと同様な、一種惹きつけられる氣持と、忌はしい氣持とを一緒に覺えた。「マリエットも矢張りあんな風に笑つて見せたつて」と彼は考へた。二人ながら自分に笑つて見せた意味は同じなのだ。たゞ今の淫賣婦は、はつきりと明け放しに「お氣に召したら買つて頂戴」と云つてゐるやうな所が異つてゐるばかりだ。この女の方が少くとも正直の點でマリエットよりもいゝ。その上今の女は必要に迫られてやつてゐるのだが、マリエットの方は、そして現在のすべての上流の婦人達は、自分から好んで、誘惑的な憎むべき情慾を弄んでゐるのだ。街を彷徨ふ彼

女等は、汚いと云つてゐられない程渴きの烈しい人に飲ませる腐り水のやうなものだが、劇場の棧敷や、貴族の客間にゐる彼女等は、知らずに近寄つてそつと觸れる者は誰をでも毒殺する劇薬のやうなものである。

「人間に存在する肉慾の獸性は厭ふべきではあるが」と彼は考へた。「然しその獸性が赤裸々の獸性として存在する限りは、我々は高い精神生活の上からそれを觀察して賤んでゐるから、墮落したとしないを問はず、その人間は矢張り生れたまゝの人間である。然しその獸性が、詩的感情とか美的感情とかの皮を被つて我々の尊敬を要求する時は、その時は、既に我々は全く獸性に吞まれて了つて、最早善惡の區別さへつかず、ひたすらに獸性を崇拜するに至つて了ふ。さうなれば實に恐るべきことである」

二十

モスクワへ歸ると直ぐ、ネフリユードは監獄病院へマスロワを訪ねた。病院の玄關番はネフリユードを覚えてゐて、彼を見ると直ぐ、マスロワはもう此處にゐないと告げた。

「では何處へ行つたのですか？」

「檻房へ戻りました」

「どうして」と彼は訊ねた。

「實は、あなたの前ですが、一體あゝいふ人間は……」と玄關番は輕蔑の口調で云つた。「助手の醫員と妙な事がありましたので」

ネフリユードは、自分とかうした關係になつてゐる今のマスロワが、そんな事を仕出かさうとは想像もしなかつた。彼は茫然として了つた。次には烈しい苦痛と侮辱を感じた。自分の申し出で頭からはねつけて、泣いたり罵つたりしたのも、矢張り自分を欺さうとする手管だつたのか？湧き上つて來る絶望を然し彼は

ちつと抑へた。

「いや、何んな事があらうとこの決心を翻してはならぬ。彼女が何をしようとするかは彼女自身の知つた事だ。自分は飽迄も自分の良心の聲に従つて行へばいいのだ」

そして彼は病院を出て監獄の方へ向つた。

事務室で暫く待たされたネフリユードの前へ、やがてマスロワが現れた。彼女は彼の沈んだ表情を見るとさつと顔を染めて眼を伏せた。そのごまごました様子が、また更にネフリユードの疑惑を深めたのだつた。これ迄通りに打ち解けようと思ひながら、然し彼は彼女と握手する気にはなれなかつた。

「今日は悪い報知を持つて来たよ」と彼は氣の乗らない聲で云つた。「元老院へ出した控訴は棄却になつて了つた」

「きつとそんなことだらうと私も思つてました」と彼女はかすれ聲で云つた。眼

は涙で一杯だつた。その涙を見ても彼の心は和まなかつた。

「だが氣を落すことはない」慰めてやらなければいけないと氣を取り直して彼は云つた。「皇帝陛下へ上奏すれば何とかかなるだらうから」

「そんなこと私はちつとも考へてませんわ」と彼女は濡れた斜視の眼で悲しげにネフリユードを見詰めて呟いた。「貴方は病院で多分もう私の噂はお聞きになつたでせうね」

「それが何うしたんだい。それはお前一人の知つた事なんだ」抑へようとしたけれど、誇を傷けられた怒りが再び湧き上つて来た。

「さあ、この請願書へ記名して呉れ」と彼はポケットから取り出した願書を卓の上へ擴げた。卓に向つて腰を下ろしたけれどマスロワは、胸に迫る悲しさにわな／＼と震へてゐた。その様子をちつと眺めてゐるネフリユードの心には、怒りと憫みとが入り混つて、悪と善との感情が争ひ戦つてゐた。——が遂に憫みの情が

勝つた。

署名を済ますとマスロワは立ち上つて、またネフリユードをちつと見詰めた。

「どんな事があつても私の決心は變らない」と彼は云つた。「お前が何處へやられやうと私は一緒に行くよ」

彼は別れを告げて外へ出た。曾て感じたことのない平和と喜びと愛を、彼は今感じる事が出来た。マスロワを愛するのは自分自身の爲めではなく、彼女の爲め、神の爲めにであることが解つた。

然しマスロワが病院を追ひ出された事件の真相はかうであつた——

或る時、彼女は看護婦長の吩咐で、廊下の端れにある薬局へ薬を取りに行つた。丁度其處に以前から彼女に云ひ寄つてゐた面筋だらけの助手の醫員が唯一人ゐてマスロワを見ると突然抱きついたので、彼女はそれを振り拂つて逃げようとしたが、男の頭を烈しく突き飛ばした。そのはづみに薬棚の壇が二本轉がり落ちて碎

けた。その音を折り悪しく通りかゝりの醫員長が聞きつけた。そして顔を眞赤にして其處から飛び出したマスロワを見ると、彼は憤然と怒鳴つた。

「こらつ、怪しい眞似をすると承知せぬぞ！何だそのざまは？」

そして醫員長は靜かに頭を上げて、眼鏡の底から眼を光らしてちつと二人を見詰めながら病室へ入つて行つた。マスロワはその日の中に監獄へ送り返されて了つたのである。

こんな事情で病院を追ひ出されたのが、マスロワは情なくてならなかつた。最初ネフリユードとの事があつて以來、これまでの長い間に起つた色々の男との關係が、今は全く厭はしくなつてゐたからである。過去現在の自分の境遇が、面筋だらけの助手の醫員にまで、自分を辱める權利があるかのやうに思ひ込ませてゐるのが心外だつた。つくづく自分が憐れになつて涙が溢れて來た。彼女は今もそれをネフリユードに訴へたく思つただけけれど、何だかとてもそれを信じて呉れ

れさうもなく、云ふだけ却つて疑惑を深くするばかりのやうに思はれたので、一杯になる胸を抑へて口を噤んで了つた。

彼女は何時迄もネフリユードの罪を許さないで、彼を憎み通さうと努めてゐたが、その實彼女は深く彼を愛してゐたのだ。それ故何事も彼の望む儘になつてゐた酒も止めれば煙草も止め、彼の望む儘病院の看護婦にもなつたのである。結婚を拒絶し續けてゐるのも、要するに彼の幸福を願つたからである。自分のやうな女と結婚することが、何うして彼にとつて幸福となるだらう？

それなのに、全然生れ變つたやうになつてゐる自分を、矢張り今ネフリユードは普通りの無恥な女だと思ひ込んでゐる……それは元老院の控訴が棄却になつたよりも、彼女にとつては辛い悲しいことであつた。

二十一

マスロワが第一護送隊に加へられる事になつたので、ネフリユードもそれと一緒に出立する用意に忙殺されねばならなかつた。先づマスロワの件で皇帝陛下に上奏の手續きをすると同時に、彼は所有地の全部を、地代を以て村の共同費用に充てるといふ約束で、百姓達に悉く分配して了つた。

七月五日がマスロワ達囚人の一隊が出立の日であつたが、その前日、ネフリユードの姉とその良人どが、彼に會ふ爲めに田舎から出て來た。彼は家を家財道具と共にこの姉に譲つて了つた。

出立の日になつた。午後三時にモスクワを立つその汽車を見送るのには、晩くとも十二時前に監獄へ行かねばならなかつた。前彼ネフリユードは荷物を纏め、書類を整理してゐると、ふと日記を見出した。最後の部分はペテルブルグを出發する前日に書いたもので、こんなことが記してあつた。

「カチューシヤは自分に犠牲を拂はせまいとしてゐる。却つて彼女自身が犠牲に

ならうと願つてゐる。彼女は勝つた。自分も亦勝つた。軽々しく信じてはならないが、彼女の精神に今或る變化が起りかけてゐるやうに思へるのは嬉しい。まだ確り信じて了ふ譯には行かぬが、彼女はまさしく眞實の生活に返らうとしてゐるらしい——自分は非常に苦しい然も喜ばしい或る經驗をした。彼女が病院で不品行を働いたと聞いた時、自分は突然大なる苦痛を感じた。彼女に面會すると、堪え難い嫌悪と憎惡を禁じ得なかつた。然し考へて見ると、自分も以前にはそんな罪を幾度も犯してゐたので、今も尙彼女に對しては深く恥ぢ入らない譯に行かなかつた。で直ぐまた自分が忌はしくなり、彼女に對しては憐憫の情が起り、自分は再び幸福な氣持になれた。人間は常にかくの如く眼を開いて自分を省ることが出来さへすれば、何時でも幸福な同情深い心でゐることが出来るのだ」

そのあとへ、彼はその日の日記をつけた。

「——明日から新しい生活が始まるのだ。舊生活とはこれでもうお別れだ。幾多

新しい印象が眼に映じて來るけれど、自分はまだそれを統一する事が出来ない」
ネフリユードは、姉達にもう一度會ひたいと思つたが、護送隊の列車が出て僅か二時間後の次の列車で立たねばならなかつたので、もうその時間が無かつた。で支度もそこゝに下宿の下男と、矢張り同じく囚人と共に出發するヒヨードシヤの良人タラスとに荷物を托して置き、自分は辻馬車に乗つて監獄へ急いだ。
七月の堪え切れぬ暑苦しい日であつた。前夜の蒸し暑さにまだほとばりの去らない敷石や、壁や、屋根から發散する熱が、動かない空氣に流れ込んでゐた。時たまの微風にも、塵埃やペンキのむつとする匂ひが含まれてゐる。多くもない通行人は皆日陰を求めて歩いてゐた。眞黒に日に焼けた道路人夫や、氣難しげな巡查などが、日光にさらされて、うづくまつたり動いたりしてゐる。

ネフリユードが監獄へ着いた時は、護送の囚徒達はまだ廣場に集つてゐた。罪人受け渡しの面倒な仕事は朝の四時から始まつたのであるが、それがまだ濟まな

いのである。護送の囚徒は男が六百二十三人、女が六十四人であつた。それを一々帳簿と照し合はせて病人と虚弱者を除き、詳しく人数を調べた上護送の兵士に引き渡すのである。日影が段々と移り、暑さが烈しくなつた。囚人の群から息苦しいまでに人いきれが立つ。

門外には、囚人達の荷物や虚弱者を乗せて行く爲めに、二十臺ばかりの馬車が並んでゐた。そして少し離れた所には、囚徒達の親族や友人達が、彼等の出發を見送るべくがや／＼と集つてゐた。

ネフリユードもその大勢の中に混つて立つてゐた。一時間ばかりさうして待つてゐると、やがて鎖の音や、足音や、護送兵の叱り聲や、咳拂ひや、大勢の群の低い呻き聲などが聞えて來た。そして遂に出立の命令が下つた。雷のやうな響きを立て、門が開くと、忽ちちや／＼と鎖の音が高く鳴り出した。白の制服を着て銃を肩にした護送兵の一隊が眞先きに繰り出して、門の正面に規則正しい圓形

を描いて整列した。第二の號令で頭に平つたい帽子を冠つて袋を肩にかけた囚徒の群が、二人づゝ一列になつて、鎖のついた足を引き摺りながら出て來た。先頭に立つたのは重犯人の徒刑囚で、皆脊中に記號のついてゐる灰色の外套を着て、同じ色のズボンを穿いてゐた。若いのが、年寄りや、瘦せたのが、肥つたのが、青ざめたのが、黒いのが、露西人や、鞑靼人や、猶太人や、種々雑多な人間が鎖をがちや／＼鳴らしながら、これから長い旅をするのだとしつかり覺悟を決めてゐるらしく、勢ひよく手を打ち振り／＼やつて來た。次の組は流刑囚で、足に鎖をつけない代りに手錠で二人づゝ繋ぎ合はされてゐた。次は町村組合から追放された囚人で、最後に女囚の一隊が繰り出して來た。先頭は灰色の上衣を着て、頭髪を布で包んだ徒刑囚、續いて流刑囚、その後から、自分々々の勝手で、亭主の囚徒と一緒に旅に出る女房達が思ひ／＼の服装をしてぞろ／＼と出て來た。女囚の中には乳呑兒を抱いてゐる者もあつた。

ネフリユードは、その中にマスロワをちらと見たと思つたが、忽ちその姿は大勢の中へ紛れ込んで見えなくなつて了つた。
 門外で再び點檢が行はれた。袋が皆積み込まれ、車に乗ることを許された囚徒が皆乗つて了ふと、士官は帽子を取つて額の汗を拭ひ、それから胸の前で十字を切つて號令をかけた。「進めオイ」
 兵士の銃は鳴り響き、囚徒と見送り人との間には訣別の言葉が交はされた。それから一様に帽子を脱いで各自に十字を切つた。そしてこの囚徒の一隊は、護送兵を先頭に、いよ／＼砂塵をあげて動き出した。とある馬車の上で、衣服を固く巻きつけた一人の女が、おい／＼聲を立て、泣いてゐた。

二十二

囚徒の隊列が長々と續いて、最後の馬車が軋り出した時、ネフリユードは待た

してあつた辻馬車に飛び乗つた。

烈しい暑さだつた。そよとの風もなく、一千人の囚徒が蹴上げる砂煙は、街路の真中を行く行列の上に絶えず蔽ひかゝつてゐた。

同じ服装で、同じ靴で、歩調を調へた一千人の囚徒は、元氣をつける爲めに自由な手だけを勢ひよく打ち振つて進んで行く。多くの人間がかうして同じ状態に落ちてゐるのを見ると、ネフリユードには、それが何う見ても人間ではなく、何か或る特別な恐ろしい動物の種類であるかと思へなかつた。

女囚の列へ追ひつくと彼は直ぐマスロワを見出した。第二列の三番目にゐた。彼女は肩に袋を背負つて、傍目も振らずに歩いてゐたが、その面には落着いた覺悟の色が見えてゐた。ネフリユードは馬車から降りて彼女の傍へ行き、その様子を聞いたり、贈つた品物が届いたかどうかを尋ねようとすると、近くを歩いてゐた士官が忽ち駈け寄つて来て、「話をしちやいかん。嚴禁してあるんだ」と怒鳴つ

た。が監獄内で誰知らぬ者もないネフリユードなのに氣付くと急に言葉を和らげて云つた。「只今はいけません。ステーションへ着くまでごうかお待ち下さい」

ネフリユードは、後から跟いて来いと馭者に命じて置いて、舗道の上を隊列が始終見えるやうな位置を取りながら進んだ。この行列が通つて行く町の人達は皆一種の恐怖と憐憫の入り混つた妙な氣持に襲はれた。中には護送兵の所へ行つて囚徒の爲めに施與の金を差し出す者もあつた。

ネフリユードは囚徒達と同じ速度で歩いた。薄着をしてゐても矢張り堪え難い暑さで、埃交りの燃えるやうな空気を呼吸するのが苦しくてならなかつた。やつと四五丁も行くと、彼は遂にまた馬車に飛び乗つた。

「何處かに何か飲む所はあるまいか？」と彼は堪らなく咽喉が渴いて來たので馭者に訊いた。

「直ぐ其處にいゝ喫茶屋があります」と馭者は答へた。或る町角を曲ると大きな

看板を出した喫茶店があつた。ネフリユードは其處でセツセル水を一杯注文した。それからまた馬車に乗つて行列の後を追つた。

屋外の暑さは益々烈しくなる。石や壁は熱し切つた空気を吐き出すかと疑はれ往來の敷石は足を焦がしさうに思はれる。馬はのろ／＼と砂埃の道を進んだ。ネフリユードは何を考へるでもなくたゞ前方を眺めてゐた。馭者は絶えずこくり／＼と居眠りをしてゐる。

囚人の一人が到頭日射病で打ち倒れた。ネフリユードは自分の乗つてゐた馬車を提供して、その囚人を附近の警察署まで運ばした。

ネフリユードが停車場へ着いた時には、囚徒達はもう鐵格子の窓のついた列車に乗り込んでゐた。列車に近づくことを許されない見送り人達は皆ブラットホームに立ち並んでゐた。けれどネフリユードは内密で護送の軍曹に心附けをしたので、列車の傍近く寄ることを許された。教へられた第三番目の車輛の窓へ近づく

ど、汗の臭ひの籠つた熱い空気がむつとして、甲走つた女の聲がはつきりと聞えた。が彼の顔を見ると女達は騒々しい話し聲をはたと止めた。マスロワは白のジヤケツ一枚で、頭のハンケチも取つて向側の窓に腰掛けてゐた。彼女はいそぐと立ち上つて、真黒な髪にハンケチをかけ、ほてつた顔に微笑を浮かべながら此方の窓際へ来て格子に掴つた。

『ひどい暑さですわね』と彼女は嬉しさうににこ／＼して云つた。

『品物は届いたかね?』

『え、ごうも有り難うございました』

『で他に何か欲しいものはないかね』

『い、え、もう別に……』

『何か飲むものが頂けますとね』とヒョードシヤが横合ひから聲をかけた。

『さうね、飲むものが少し頂けるといゝんですが』

『ちや何かね、飲むものは呉れないのかい』

『少しは貰ひましたが、もう飲み盡くして了ひました』

『ちや護送の役人に頼んで貰つてやらう。私達はニーシユニーへ着くまではもう會へないだらうね?』

『おや、では矢張り貴方はいらつしやるのですの?』と彼女は意外らしく、然し嬉し氣にちつとネフリユードの顔を見詰めて云つた。

『次の列車で行くつもりだ』

マスロワは黙つて深い溜息をついた。

『ちよいと旦那、日射病で十二人死んだつて本當ですか?』と年寄りの女囚が突然男のやうな聲で問ひかけた。

『十二人とは知らないが、二人だけは見て来た』と彼は答へた。

『何でも十二人殺したつて云ひますが、そんな酷いことをしても、奴等には何の

御處刑もないのでせうか、あの畜生達には！」

『所で女の中には病人はなかつたかね』と彼は訊ねた。

『え、女はみんな丈夫です』と小柄な一人が笑ひながら云つた。『たゞ一人、産氣づいて赤ん坊が出かゝつてる女があります。ほら、あすこで……』と先刻から呻き聲の聞えてゐる隣りの車輛を指して云つた。

『お願ひが出来れば』心底の嬉しさを押し隠しながらマスロワは云つた。『あの方をね、あんなに苦しんでゐるのですから、後廻しにして上げるやうに、貴方から士官の方へ話して頂けませんでせうかしら？』

『宜しい、話して見よう』

『それからもう一つあるんです。この人を旦那のタラスさんに會はして上げるやうに出来ますまいか』とにこ／＼笑つてゐるヒョードシャを見ながら附け足した。『タラスさんも矢張り貴方と御一緒に行くんでせう』

護送の兵士の注意で、彼等の會話はそこで終つた。

第二番目のベルが鳴つて遂に汽車は徐々と動き出した。ネフリユードはタラスと並んでプラットホームに立ちながら、眼の前を過ぎて行く鐵格子のついた車輛の一つ／＼を見送つた。女囚の三番目の車輛が来た。その窓際に他の女と一緒に立つたマスロワの頬には寂しい微笑が浮んでゐた。

二十三

ネフリユードが乗つて行かうとしてゐる普通列車が出るまでには、まだ二時間もあつた。この時間を利用してもう一度姉を訪ねようかと思つたが、朝から色々な事で駆け廻り廻つたのですつかり疲れてゐた。で彼は一等待合室の長椅子に腰を下ろすと、思はずと／＼となり、直ぐその儘横になるとぐつすと寝込んで了つた。

『もし、ネフリユード公爵ではいらつしやいませんか?』とボーイに聲をかけた。彼は飛び起きた。『誰か御婦人のお方がお尋ねになつていらつしやいます』

眼を擦りながら入口の方を見ると、丁度そこへコルチャーギナ家の人々が現れた。一行は今或る地方へ轉地に出掛けようとしてゐる所である。ミツシーの顔も見えた。

ネフリユードを尋ねて来た婦人と云ふのは、彼の姉のナターリヤと老婢のアグラフェーナであつた。ナターリヤは待合室へ入ると、弟ミツシーを同時に見出した。で弟の方へはたゞうなづいて見せて、まづミツシーの傍へ行き、彼女と接吻を交はした。

『到頭探しましたよ』と彼女は弟の方へ近寄りながら云つた。

『よく来て下さいましたね』

『もう先刻から来てゐたんでしたよ』と彼女は云つた。その時向うの卓で食事をしてゐたコルチャーギナ老公爵が此方に向いたので、ネフリユードは視線を合はして了つた。

『ネフリユード君、長途のお祝ひに何か一つやらないかね』

ネフリユードは巧く辭退してまた姉の方へ向いた。

『然しこれから何をするつもりなの?』とナターリヤが訊ねた。

『自分で出来る事なら何でもやります。まだ見當はついてませんけれど』

『そしてあの方達との關係は?』と彼女は微笑みながら、コルチャーギナの方へ眼差を遣つた。

『もう何の關係もありません。お互ひに少しも悔む所もないと思ひます』

『でもミツシーさんが可哀相ね。私はあの方大好きなだけだけれど』それから少し云ひ淀んでから續けた。『何うして西比利亞などへ行くの?』

『行かなければならぬから行くのです』とネフリユードはきつとなつて云つた。
 『あなたの仰しやるのはカチューシャとの結婚の事なんですか。あのことなら、私はもうすつかり決心を固めてゐます。カチューシャは何處迄も承知しません』
 この話になるといつてもさうであるやうに彼の聲は震へた。『カチューシャは私の犠牲を受けようと思せず、却つて自分を犠牲にしようとしてゐるのです。たとへそれが意地から出てゐるにせよ、私はあの女の犠牲を受ける事は出来ません。で彼女が何と云はうと、私は彼女と一緒に行くのです。そして力の及ぶ限りカチューシャの苦勞を軽くしてやりたいと思つてまゝ。』

コルチャギーナ家の人々が出て来て、一等客車の方へ行つた。ネフリユードは手荷物を持たした人夫と、袋を肩に擔いだタラスと一緒に、それとは反対の方へ歩き出した。

『この人が私の同伴なんです』と彼はタラスを指しながら姉に云つた。

『三等ぢやありませんまいね』とナターリヤが尋ねた。

『いえ、三等にしました。タラスと同車して行くのですから』と答へて、『それからもう一つクジミンスキー村の地所ですがね、あれはまだ百姓にやらずに置きましたから、私が死ねばあなたの子供が相続出来ます』

『ドミートリイ、もうそんな話はお止しなさい』

『それに地所は百姓に呉れて了つたとしても、他にもまだ財産があります。私が死ねばみんなあなたの子供のものです。恐らく私は結婚はしないでせう。よししたとしてもきつと子供は出来ますまいから』

『ドミートリイ、そんな事を云ふものぢやありませんよ』とナターリヤは云つた。然しネフリユードはこの話で、姉の顔が晴れやかになつたのを見逃さなかつた。

ネフリユードは車内へ入つたが、息苦しさは居堪らなくなつて、直ぐ車輛の後部の乗降口へ出た。

流行のボンネットと肩衣を着けたナターリヤは老婢のアグラフェーナと並んで立ちながら、何か云ふことはもうないかと考へてゐる様子だった。だが今の財産に關した話が、ちよつと姉弟間の優しい感情を害ねたので、二人は他人同志のやうに妙に改つて了つた。でナターリヤは漸く汽車が動き出すとほつとした。そして物優しい悲しい顔付きになつて、やつこのことで、『さようなら』とだけ云つた。ネフリードの方でも、昔の極く仲よしだった姉の面影はもう無く、あの無智で不愉快な男ラゴヂンスキーの奴隷のやうになつてゐる姉だけしか感じられないのが寂しかった。殊に今そのラゴヂンスキーに利益のある話をした時、姉の顔が俄かに生き／＼と輝いて來たことを思ひ出すと、何とも云へぬ佻びしい氣がした。

二十四

ネフリードが乗つた大きな三等車は、日がな一日、日光の下に照りつけられ

て走つてゐたので、車内の暑さは堪らなかつた。彼は後部の小さな展望車へ出て立つてゐたが、其處とても涼しい風は少しもなく、列車が建物の間を通り過ぎる時だけ、僅かに息がつけるのだった。いつか彼は今朝方眼にした二人の囚徒の死のことを考へてゐた。

「全く殺されたのだ！殊に戦慄すべきは、殺された事は確かであるのに、一體誰が殺したのか誰も知らない」と云ふことだ。彼等が斃れたのは、上の役人の命令によつて、大勢と共に監獄から引き出されたのが原因である。だが役人は規則通りに命令を下したばかりなのだから、自分に罪があるなどは考へさへしないだらう。囚徒の健康診断をした醫者はその職務によつて、虚弱者だけを擇り分ければよかつたのだ。この恐ろしい暑さのことや、あの日盛りを人いきれに蒸されて行く危険を前から知つてる筈はない。典獄はたゞ流刑囚の若干を、何時何日に送り出せといふ命令を奉じて、その執行令狀を與へたばかりだ。護送士官の職務は一

定の場所から他の場所へ囚徒を移すことをすればいいのだ。彼はいつもの通り引率して行つたので、その途中、あんな強壯な二人の人間が、歩行に堪えられなくなつて斃れやうなどは夢にも思はなかつた。すると誰にも罪はないことになる。しかもあの囚徒が殺された事は確かな事實である」と彼は考へて行つた。「これはつまり知事と云ひ典獄と云ひ、警察官と云ひ、彼等が皆、人類の中には人間としての温情を全く加へる必要のない境涯があるを信じてゐる事實から起つて來るのである。若し彼等が、知事や典獄や警察官でなかつたら、こんな烈しい暑さの最中、大勢の者を引き出す前には二十遍も首を捻つて考へたに違ひない。引き出したにしても、途中で二十遍も休息させたに違ひない。弱り切つて息の喘むやうな者が出れば、木蔭に連れて行つて手當をしてやつたに違ひない。所が却つて他の者が劬つてやるのをさへ妨げてゐる。それはつまり囚徒達に對しては人間の取り扱ひをしなくつてもいい、官吏の職務は人間の道徳關係以上だと考へて

ゐるからである。さうだ、これがすべての原因だ」
 ネフリユードは何時の間にか空模様が変わつて、自分の立つてゐる展望台や外套が雨に叩かれてゐるのにも氣付かずにゐた程だつた。彼はやつと顔を上げて、この雨によつて甦つた野原や、森や、畑などを眺め渡した。やがて夕立の雨は上つた。そして東の空、地平線から少し上の邊に濃く、薫色の浮き出た美しい虹が現れた。

暫くしてから、ネフリユードはタラスの傍の席へ戻つた。タラスは丁度一杯やつたもので上機嫌の所だつた。彼は自分の女房の犯罪の顛末や、自分も彼女に従つて西比利亞へ行く途中であることなどを、隣席の新しい知己の男に詳しく話してゐるのだつた。

汽車の進行が次第に鈍くなつて、とある驛へ彼等は着いた。ネフリユードは車を出て濡れたプラットホームへと降りて行つた。

下車する前から、彼は驛の構内に素晴らしく立派な馬車が止つてゐるのが眼に入つてゐた。それはコルチャーギナ家の人々を出迎へる爲めの馬車であつた。ネフリエードはまたこの連中に會つて、今朝のやうに言葉を交はすのが厭だつたので一行を遣り過して了ふまで、出口から遠く離れて待つてゐた。

二十五

マスコワが加つてゐる囚徒の一隊は、凡そ三千哩ばかり進んだ。マスコワはベルム市迄は刑事囚と一緒に汽車や汽船で行つたが、此處迄来てやつとネフリエードの骨折りで國事犯の仲間へ入る事を許された。

ベルム市迄の道中は、體にも彼女にとつては大變な苦痛であつた。大勢の中に體を揉まれながら、埃は吸ふし、蚤や虱や蠅などには苦しめられるし、心は蛆虫同様な厭な男共に煩はされた。一體囚徒護送の途中には悪弊があつて、護

送兵から囚人までが、女囚に對して戯れかゝるのを當然としてゐた。殊にマスコワは以前が以前なると、男好きのする容貌なので、一層虐められた。けれどヒョードシヤ及びその亭主のタラスと親しくしてゐたので少しは助かつた。タラスは自分の女房が騷ものにされてゐると聞いて、ニージュニー、ノウゴロドで、わざと罪を犯して囚人となり、今は一行と共に旅をしてゐるのであつた。

マスコワは國事犯人と一緒にされてから更に氣樂になつた。手當や食物もよい上に、もり男共に惱まされる恐れもなくなつた。何よりも一番好かつたのは、色々な人と知り合ひになつて、非常に有益な感化を受けたことであつた。中に特別彼女にとつて良き指導者が二人ゐた。一人はマーリヤと云ふ暗褐色の眼をした美しい娘で、もう一人はシモンソンと云ふ青年革命家であつた。彼は菜食主義者なので獸の皮は身に着けず、護謨のジャケットを着て、護謨の上靴を穿いてゐた。

固より苦しい境遇には違ひなかつたけれど、モスクワで六年間の放縱生活を過

した擧句、幾月か刑事囚と共に收監されてゐたカチューシャの身にとつては、國事犯と一緒に過すのは大變幸福に思はれた。一日に十五哩から廿哩歩んで、相應に美味しい食物を供され、二日置きに一日の休息が許されるので、彼女は健康になつた。殊に新しい仲間との交りは、曾て知らなかつた純眞な愉快なものを彼女に與へた。

「さうだ、私は宣告された時には泣いたつけ」と彼女は考へた。「でもこれからは一生そのことに就いて神様に感謝しなければならぬ。そのお蔭でこの人達と一緒になつて、今迄知らなかつた事を覺えたのだから」

彼女はこの新しい仲間達には、皆懇ろにしたが、わけてもマリーリヤには一段の尊敬を拂つた。この美しい少女は、富裕な或る將軍の娘で、學問も深い立派な令嬢であるが、分けて貰つた自分の財産はすつかり捨て、了ひ、貧しい女工同様な暮しをしてゐた。そして自分の美貌をよく知りながら、それを喜ばないのみか

却つてそれをひどく恐れて、戀に落ちることなどは心から厭つてゐるのを、マスコロフは知ることが出来た。またマリーリヤは如何なる場合にも、自分の事よりは先づ他人の事を考へずにはゐられない性質だつた。マスコロフは衷心から彼女の言行に感動させられて、何事によらず彼女の真似をせずにはゐられなくなつた。一方マリーリヤもマスコロフの獻身的な思慕に動かされて、それに報ひるやうになつた。マスコロフは多くの人々から感化を受けたが、中でもマリーリヤとシモンソンからの感化が一番大きかつた。それは彼女がマリーリヤを愛し、またシモンソンを愛してゐたからである。

シモンソンはまだ小學生の時分、會計吏をしてゐる父が不正な金儲けをした事を知ると、その金は當然他人に與へて了ふべきであると父に忠告した。所が父はその忠告を耳にも入れないで却つて彼を叱りつけた。彼はそれなり家を出て了つた。大學を卒業すると直ぐ民黨に加入して、田舎の學校長となり、自分の信じる

所を大膽に教へ、そして不正と信じるものは盛んに攻撃した。で彼は遂に拘引された。審問の時に彼はまた、裁判官は自分を裁判する権利はないと主張した。そして彼は何を問はれても飽迄沈黙を守り続けた。かうして彼はアルハンゲリスク縣へ流されたが、その流刑中、彼は生涯を捧げるべき一個の宗教的理論を考へ出した。

彼は精神上の問題ばかりでなく、あらゆる實際上の問題をも矢張り彼一流の意見で行つた。たとへば幾時間働いて幾時間休息すべきであるとか、食物の種類や着物の着方にまで一種の規定を持つてゐた。然し彼自身は非常なはにかみ家で控へ目勝ちだつた。

彼はマ스로フを愛しながら彼女に著しい感化を與へた。マ스로フは早くも彼の心を見抜いた。こんな人物に戀されたといふ事實が、彼女自身の自尊心を甦らせた。ネフリユードが結婚を申し込んだのは、彼の寛大な心と一面には過去の罪

亡ぼし、即ち道徳上から出た希望であつたが、シモンソンは現在あるがまゝの彼女を愛したのである。彼女はシモンソンが自分を一個の婦人として遇して呉れるのが非常に嬉しかつた。彼女は彼を失望させないやうにと、ひたすら自分の中の最高の徳性を奮ひ起し、出来る限り立派な女にならうと努めた。二人の間には別にこれと云つて重要な言葉は交はされなかつたが、彼女は自分が傍にゐる時語るシモンソンの言葉は、よしや誰と話をしてゐるにせよ、すべて皆自分に對して語られてゐるやうに思つた。

二十六

囚徒の一行がベルム市を去る迄に、ネフリユードは二度しかカチューシャに會はなかつた。二度とも彼女は打ち解けないで冷淡な様子をしてゐた。道中の模様や、何か必需品はないかと訊いても、彼女は何だか曖昧な返事ばかりしてゐたが

國事犯の方へ廻されてから彼女に會つて見ると、自分の心配は全く取り越し苦勞であつたことが判つた。彼が切望してゐるやうな變化が會ふ毎に彼女に現れて來るのが認められた。彼女は彼を見ても、今は嬉しさうにさつぱりした態度で迎へ色々心配して貰つた事、分けても今ゐるやうな人々の仲間へ自分を入れて呉れた事などを感謝した。

マスロワが國事犯人の中にあつたので、ネフリユードは自然彼等の大勢と知り合ひになつた。

露西亞に革命運動が起つた最初から、ネフリユードは嫌惡と侮蔑の眼で革命家といふものを眺めてゐた。彼等の政府に對する慘忍な陰險手段、殊に彼等の行つた暗殺を憎んでゐた。が段々と親しくして、彼等が如何に政府から苦しめられてゐるか解つて見ると、彼等は矢張り現在のやうな人間になるより他仕方がなかつたのだと思はれて來た。ネフリユードはまた、彼等は決して一部の人が想像

するやうな無賴漢でもなければ、また或る人が信じるやうな素晴らしい英雄でもなく、全く尋常一様の人間であることを知つた。彼等の中にも、何處にもある如く、善人もあれば悪人もあり、中位な者もあるのだ。

夏が過ぎて、いつか冬近い日になつてゐた。空は一面に深い霧に罩められて一寸先も見えない程の暗い夜であつた。ネフリユードは、西比亞街道の罪人宿泊所を尋ねて行つた。護謨ジャケットを着たシモンソンが、松薪を持つてストーブの前に躡んでゐた。ネフリユードが入つて行くと、彼はその突き出た眉毛の下から彼を見上げて、躡んだなり手を差し出した。

「よくいらした。貴方にお話したいことがあるんだ」とシモンソンは意味有り氣な顔をして云つた。

「何ですか？」とネフリユードは訊ねた。

「後で云ひませう。今は忙しいから」そしてシモンソンは再びストーブの方へ振

り向いた。

其處へカチューシャが柄のない箒で塵を掃きながら一つの戸口から出て来た。白いジャケットを着て裾をたくし上げ、埃のかゝらないやうに頭にはハンケチを冠つてゐた。ネフリユードを見ると顔を赤くしたが、いそぐとして箒を投げ出して寄つて来た。

『部屋の掃除かい』と彼は握手しながら云つた。

『え、私の昔の仕事ですわ』と彼女はにつこりした。『でも此處の埃つたら！掃除のし通しなんですよ』それからシモンソンの方を向いて『あの着物は乾いて？』と尋ねた。

『大體乾いたやうだ』とシモンソンは妙な眼付きで彼女を眺めながら答へた。ネフリユードは何かしら不安な胸騒ぎを覺えた。

『さう、ちや今度は外套を持つて来て乾ませよう』と云つてから、他の戸口を指

してネフリユードに云つた。『みんな此處に居りますわ』

彼はその室へ入つた。顔馴染みの囚人達ががや／＼騒いでゐた。暫く彼等を相手に喋つてゐると、いつの間にか入つて来て、仰向けに寝轉んでゐたシモンソンがネフリユードの傍へ来て云つた。

『耳を借して頂けませうか？』

『はあ』と答へてネフリユードは立ち上つた。カチューシャは吃驚したやうな顔をして見上げたが、ネフリユードの視線に會ふと眞赤になつて、途方に暮れたやうな眼をした。

『實は他でもありませんが』と廊下へ出るとシモンソンは云ひ出した。『私は貴方とカチューシャとの間柄をよく承知してゐますから、一應お話しするのが義務かと思ひまして』

シモンソンの態度は眞剣だつた。この時マリーヤが廊下へ現れた。そして二人

の様子を見ると直ぐ立ち去らうとした。

『行かずに此處にゐて下さい』とシモンソンは彼女を引き止めた。『私は誰にも秘密はない。殊にあなたには』

『さう、では』と云つて、マリーヤは傍の腰掛けの方へ廻つて耳を傾けた。彼女の美しい眼は何處か遠い所を眺めてゐるやうである。

『お話を云ふのは』シモンソンは繰り返した。『貴方とカチューシャとの間柄を存じてゐますから、私と彼女との間柄を一應お話しして置かねばならぬと思ひまして』ネフリユードはシモンソンの素直な態度にすつかり感服して了つた。

『と仰しやるのは』彼は訊ねた。

『實は私はカチューシャと結婚したいのですが……それを私は彼女に打ち明けよう決心しました』

『それはカチューシャの心一つです。私の關した事ではないでせう』

『さうです。だがあの女は貴方を差し置いては決斷が出来ません』

『何故ですか？』

『貴方との關係がきつぱりしない中は彼女の決心はつきません』

『いや、その問題なら私にはもう落着してゐます。私は自分の義務を果す爲めにカチューシャの荷を軽くしてやらうとしてゐるので、その爲めに彼女の自由を束縛しようとは決して思つてません』

『さうでせう。然しあの女は貴方の犠牲を受けることを望んでゐません』

『いや、犠牲ではありません』

『とにかく、あの女は貴方の御厚意は受けません』

『それなら何も改めて私にお話しなさるにも及ばないでせう』とネフリユードは云つた。

『あの女は、自分の思つてるやうに貴方にも思つて頂きたいと願つてゐるのです』

『と仰しやるのは、私の義務だと考へてゐる事をしてはならぬと云ふのですか？それは無理でせう。私は自分の義務を投げ出して丁度譯には行かないけれど、カチューシャは何も私に對して義理立てすることは無い、自由な體です』

シモンソンは口を噤んで暫く考へてゐた。

『さうですか。ではあの女に話させよう。ですが、私があの子の色に溺れたのではないといふことは御承知下さい。私はあの子を、世の中の苦勞をし抜いて來た立派な婦人として愛してゐるのです。私はあの子から何もものを求めはしません。私は唯あの子を助けて、明るい境涯にしてやりたいと眞底から願つてゐるだけです』

ネフリユードはシモンソンの聲が震へるのを聞いて心を打たれた。

『あの女の生涯を明るくしてやりたいと思つてゐるばかりです』とシモンソンは續ける。『あの女が貴方のお世話になるのを欲しないなら、私が代つて世話をし

やりませう。若しあの子へ承知なら、私は何處迄も一緒に行きませう。四年と云へば長い年ではありません。私が一緒だつたら、幾らかあの子を明るくすることが出来ませう』

そこで再び言葉を途切らした。

『何と御返事をしたらいゝのでせう』とネフリユードは云つた。『カチューシャが貴方のやうな立派な保護者を得たのは私としても喜ばしいことです』

『それを伺ひたかつたのです』とシモンソンが言葉を挾んだ。『貴方があの子を愛し、その幸福を願ふとして、私があの子と結婚するのを、貴方はいゝことだとお考へになるかどうか、それをお伺ひしたいんです』

『勿論いゝことだと思ひます』とネフリユードはきつぱりと答へた。

『すべてはあの子次第ですが、私はたゞあの子に長い間の息抜きをさして、安心な身にしてやりたいばかりなのです』

シモンソンは初めて子供のやうな無邪氣な笑顔をした。そしてネフリユードの傍へ行き、羞しさうに微笑しながら彼に接吻した。

『ではあの女に話させよう』と云ひ残してシモンソンは其處を立ち去つて行つた。

二十七

『貴方はどう思ひなさいまして?』とマリーリヤは云つた。『戀ですわ、全く戀ですわ。あの人があんなことをしようとは思ひませんでした。あのウラジミル・シモンソンが。しかもあんな馬鹿々々しい子供らしさで。考へると情ないことですよ』
『然しあの女は——カチューシャは何と思つて居るでせう?』とネフリユードは訊ねた。

『あの人?』とマリーリヤはちよつと間を置いて『さう、御承知の通りあんな職業をしてゐたに似氣なく中々固い人ですわ。本當に美しい人です。あの方は貴方の

ことを思つてそれはくいとしがつてゐますのよ。ですから貴方に御迷惑をかけるない爲めに、何と仰しやつても貴方との結婚には同意しないのでせう。ですけど貴方がいらつしやると、あの人の胸は掻き亂されて辛いのですわ』
『では私は何うすればいいのでせう?』

『すつかりあの人にお打ち明けた方がいゝと思ひますわ。何事もはつきりして置くに限ります。お話してお了ひなさいましよ。呼んで来て上げませう』
『どうぞ』と彼は云つた。

一人になると彼は考へ込んだ。シモンソンの申し出でによつて、實は氣弱くなつた瞬間には重荷のやうに感じられた仕事から、全然解放された譯であるが、流石に何となく残念のやうな氣もするのであつた。尙また第三者であるシモンソンのこの申し出でによつて、自分の義理を貫かうとした特殊な意志が何でもないものになり、同時に今迄して來た一切の事が無價値な小さなものになつて了ふやう

に思はれた。彼女と何の關係もないあゝした立派な人間が彼女と一緒にになる事になれば、自分の今迄の犠牲なんか何でもないものになる。然しそんなことを思ふ心の中には、世間並の嫉妬心も混つてゐたかも知れない。自分は彼女に愛されてゐると思ひ込んでゐたので、彼女が他の男をも愛する事が出来るとは思ひたくなかつた。それからまた彼女が服役中傍にゐて蔭ながら世話しようと目論だ計畫も消えて了つた。若しシモンソンが彼女と結婚するならば、自分はゐる必要がなくなるから、何か別に新しい計畫を立てねばならぬだらうとも彼は考へた。

彼が自分の感情を分解し切らない中に、扉が開いてカチユーシヤが入つて來た。彼女はつか／＼と彼の傍へ來た。

『マーリヤが私を呼びに來ましたが』と彼女は云つた。

『あゝ私は少しお前に話さなければならぬことがある。まあ腰をお掛け、シモンソンから話があつたんだが……』

カチユーシヤはエプロンの下で手を組んで腰を掛け、大變落着いてゐるやうであつたが、シモンソンの名を聞くとさつと顔を赤らめた。

『あの人はどんな事を申しました？』

『お前と結婚したいと云つてゐた』

彼女は術なさうに眼を伏せた。

『それに就いて彼は私の同意、まあ助言を求めて來たんだ。で私はそれはカチユーシヤの心次第だと云つてやつた』

『それは一體どういふ事なんです。どうしてなんです』と彼女は低い聲で云つた。二人の視線が合つた。

『お前は何か心を決めなくちやならん』とやがて彼は云つた。

『何を決めるんですの？何もかも前から決つてますわ』

『いやさうぢやない。シモンソンの申し出を承知するかしないかを決めなくちや』

ならないのだ』

『私がどんな人の妻になれます？私のやうな罪人が、どうしてシモンソンまで汚されませう』と云つて彼女は悲し氣な顔をした。

『だが若し宣告が取り消されたら』

『いゝえ、どうか私に構はないで下さい。もう何も申し上げることはありません』
そして彼女は立ち上つた。

二十八

門の外へ出るとネフリユードは深い吐息をついた。

晴れ渡つた空に星が輝いて、地は固く凍つてゐた。彼は宿屋へ歸つて眞暗になつた窓をどん／＼と叩いた。

部屋へ入つて着更へを済まし、オイルクロース張りの長椅子に横になつて、彼

は今日の出来事を繰り返して考へた。シモンソンやカチューシャの事は意外であり、且重大の事でもあつたが、別段それには深く氣を留めなかつた。この事件に關する彼の位置は非常に複雑で漠然としてゐたので、長く考へ続けることは出来なかつた。

然しこの三ヶ月間、眼のあたり見て來た種々の事柄が、次々に彼の頭に浮んで來るのだつた。或る人間が他の人間に、あらゆる凌辱や虐待を加へつゝあることを何處か遠い所から聞いてゐたのと、現在それらの敗徳や苛責が加へられるのを目撃するのは、その間に非常な相違があつた。

『他の者が平氣で氣付かすにゐるのを、自分だけが氣を揉むといふのは、自分の氣が狂つてゐるからではあるまいか。それとも、あんな奇怪なことを平氣でしてゐる彼等の氣が狂つてゐるのだらうか』

凡そ自由な人民の中で、最も熱誠で最も激し易く、最も才能があつて、最も強

壯で、且つそれと同時に、狡智に缺けてゐる者が、眞先に法律によつて捕縛されて了ふのだ。そしてこれらの人達は獄内の生活によつて、自然とその心を墮落させられる。しかもそれが完全に墮落して了つてから放免されるので、獄内の悪徳は更に一般社會へ撒き散らされるのである。囚人の間に行はれてゐる悪徳、例へば飲酒、賭博、残忍な行爲などの根本の原因は、人間は互ひに罰し得るといふ間違った考へから發してゐる。それらの悪徳は獄内で初めて發生したのではなく、實は内閣や參議院や國務省に胚胎して、それが獄内で實を結んだに過ぎないのである。

ネフリユードは二番鶏が鳴くまで考へ續けてゐた。

翌日、彼はまた馬車で囚徒の一隊の後を追つた。そして村有牧場の門を過ぎた所で、袋や病囚徒を乗せた馬車に追ひ着いた。凍つた泥濘路は、重い轍に壓されて解け始めた。凸凹した荒れた路を十丁餘も續く囚徒の一行を追ひ越さうとして

ネフリユードは馬車を急がせた。と彼は道の向う側に、カチューシャの青い肩掛と、他の一人の女の黒い衣服と、シモンソンの編細工の帽子を見出した。シモンシは女囚達と一緒に歩きながら熱心に議論をしてゐた。

彼等はネフリユードを見ると頭を下げて會釋した。シモンソンは殊に眞面目に帽子を脱いで禮をした。ネフリユードは何も云ふこともないので默禮を返したまゝ、馬車を馳つた。囚徒の一行を半分追ひ越した時、森の端れへ出た。道の兩側には果てしなく野が擴がつてゐた。雲は千切れ／＼に飛び去つて、空はすつかり晴れてゐた。森の上へ昇つた太陽に照らされて、山々は白く輝き出した。

馬車は大きな村へ入つた。通りには人が一杯歩いてゐた。露西亞人もあれば他國人もゐて、何れも妙な帽子や外套をつけてゐた。確かに町が近づいて來たのである。駁者は手綱をぎゆつと引き締めて素早く川縁へ馬車を馳け下ろした。其處は渡船場だつた。ネフリユードの馬車は他の荷馬車と一緒にやがて筏の上に乗せ

られた。筏の上ではみんな静かにしてゐた。船頭の長靴の音と、もち／＼動いてゐる馬の足音の他は何も聞えなかつた。

ネフリユードは筏の縁に立つて廣い河面を眺めてゐた。シモンソンと並んで元氣よく歩いてゐるカチューシャの姿が心に浮んだ。シモンソンのやうな男の愛を得て、正義に向ふ眞正な堅固な道を見出したのだから、彼女が元氣よくいそ／＼してゐるのは當然で、勿論それは喜んでやらねばならない筈であるのに、何故かネフリユードは、佻びしい暗い氣持の中に落ち込んで行く自分を何うしようもなかつた。

對岸へ着くと駭者はネフリユードに訊ねた。

『どのホテルへ着けますべえ』

『何處でもお前の好きな所へ』

馬車は再び走り出した。町は何處でも見る町と同じであつた。同じやうな屋根

同じやうな窓、同じやうな寺院、同じやうな店々、そして同じやうな巡査の姿——たゞ他の町と異つてゐるのは大部分が木造建築なものと、街路に石の敷いてないことだつた。

とるあホテルの前で馬車は止つた。ネフリユードは二ヶ月振りで、以前住み馴れたと同じやうな、部屋らしい部屋に身を置くことが出来た。旅馬車や、田舎宿屋や、休憩所などで二月を過して來た後なので、彼は甦つたやうな心地がした。先づ風呂へ入つてから、彼はこの地方の知事を訪問する爲めに服裝を調べてホテルを出た。

彼を乗せた辻馬車は直ぐに或る宏大な邸宅の玄關へ着いた。生憎將軍は病氣で來客謝絶中だつたが、刺を通じると幸ひに面會を許された。

ネフリユードは自分の用件——マスコワの事を知事に物語つた。

『その女の運命に關する皇帝陛下からの御狀が、今月中には私宛で當地に參るこ

どになつてゐます。それが参りますまで、その女が當地に滞留しても宜いやうにお許しを願ひたいのです』

彼は辭を低くして將軍の盡力を依頼した。

『時にごちらに御投宿ですか』と將軍はネフリユードが歸らうとする別れ際に尋ねた。『何、ゾーコの所に？驚きましたね。實にひどい宿でせう。今夜五時にやつていらつしやい。一緒に食事をしませう』

知事郎を出ると、彼は馬車を郵便局へと走らせた。

郵便局は天井の低い建築で、五六人の局員が計算臺を挟んで大勢の人々と應對してゐた。ネフリユードの名宛で來てゐる郵便物は随分澤山あつた。その中に、大變立派な封筒に入つて眞赤な封蠟で嚴封された書留郵便があつた。急いで封を切ると、何か公文書を封入した辯護士からの手紙だったので、彼は思はず顔色を變へた。讀み終ると彼はほつと吐息をついた。マ스로ワの減刑通知だつた。減刑

の指令謄本には徒刑を流刑に減する旨が記されてあつた。

これは何よりも喜ばしい重要な吉報だつた。がネフリユードの胸には直ぐまた別な考へが浮んだ。彼女の境涯が變ればそれと共に、新たな面倒な事が起るのは事實である。彼女が徒刑囚である間は、彼女と結婚することは單なる空想で、彼女の服役の苦痛を慰めてやる位置に居られるといふ他何の意味もなかつたが、今は二人の同棲を妨げる何ものもない。だが彼はその爲めの準備は何もしてなかつたのみならず、彼女とシモンソンとの關係は何うする？昨日の彼女の言葉は何ういふ意味か彼女がシモンソンとの結婚を承諾したとして、それは果して彼女にとつて幸福であらうか？それらの問題はちよつと解釋がつかかなかつた。で彼は考へるのを止めた。『今そんなことを考へるには及ばない。それよりも早くこの吉報を彼女に知らせることだ』

彼は駭者に命じて監獄へ急がした。が典獄は彼の想像通り、知事の許可證を持

たない彼に囚人との面會を拒んだ。ネフリユードは公文書の謄本を示して懇願したけれど無駄だった。

監獄の不首尾にもめげずに彼はその足で州廳へ廻つた。そしてマスロワの減刑命令の原本が到着してゐるかどうか調べて見たが、まだ着いてゐないといふことだったので、一先づホテルへ引き返した。もう丁度知事邸へ出席すべき時刻だったので、彼は直ぐにまたホテルを出た。

二十九

知事邸の饗應は非常は贅澤を極めたものだった。長い旅行で、贅澤はもとより極く普通の快樂にさへ遠去かつてゐたネフリユードにとつて、それは中々愉快なものだった。彼は其處で亞比利亞の監獄を視察に來たといふ英國人に紹介されたとして二人は宴會が終ると連れ立つて監獄訪問に出かけることになつた。

天氣は何時か變つてゐた。大きな雪が頻りに降つてゐて、もう道路も、屋根も馬車の幌も眞白になつてゐた。

陰氣な監獄の門には番兵が立ち、入口には薄暗いランプが點つてゐた。建物全體が今朝見たよりは一層陰氣に暗澹としてゐた。知事から交附された通行證によつて直ちに事務室へ通された。ネフリユードは早速マスロワに面會したいと申し出た。英國人が何かと獄内の事を典獄に向つて訊ねるのを、ネフリユードは上空で通譯しながら、今にも此處へ現れるカチューシャのことばかり考へてゐた。やがて足音がして、例の通り獄丁に連れられてカチューシャが入つて來た。獄衣を着てハンケチで頭を包んでゐる彼女を見ると、ネフリユードは俄に頭から重いものを被せられたやうな氣がした。

「生きたい、家庭や子供が欲しい。人間の生活を送りたい」
瞬間的にこんな考へが彼の心の中に閃いた。

彼は二三歩進んで彼女を迎へた。然し彼女は如何にも不愉快さうな顔をしてゐた。何時かネフリユードを罵つた時のやうに、一時ぼつと顔を染めたかと思ふと忽ち眞青になつて、ジャケットの端をいちりながら、ちよつとネフリユードを見上げたが、直ぐまた眼を伏せた。

「減刑の命令が来たのを知つてゐるか？」

「はい、獄丁から聞きました」

「それで原本が着き次第お前は放免されるのだから、何處なりと住む場所を定めて置くがよからう。その邊をよく……」

とカチューシャがそれを遮つた。

「その事なら御心配要りません。私はシモンソンの行く所へついて行きますから」昂奮してはゐたけれど、兼ねて云ふべきことを用意してゐたかのやうに、彼女はきつぱり云つた。

「成程」

「それから貴方も御承知の通り、シモンソンは私と一緒に暮すつもりであります」ちよつと間を置いて、「シモンソンは私を傍へ置きたがつてゐます。私にとつてこれより幸福なことはありません」

「どにかく二つの中の一つだ」とネフリユードは思つた。「矢張りシモンソンを戀してゐる爲めに、自分のすべての好意を何とも思はないのか、或ひは眞に自分を愛するが故に、心にもない拒絶をして、シモンソンと共に永久に埋れて了ふつもりか」

ネフリユードは氣恥づかしくなつて顔が赤らむのを覺えた。

「お前はあの男を愛してゐるのかい？」

「そんなことはどうでもいゝではありませんか。そんなこと私はもうみんな捨て了ひました。それにシモンソンは全く他の人とは異つてゐます」

「勿論さうだ。彼は立派な人物だ。だから……」
マ스로ワはまたそれを遮つた。

「いゝえ、あのドミートリイ・イワノギツチ様、私が貴方のお望み通りになつてゐないのでしたら、どうぞお許し下さいまし」と云つて奥底の知れない斜視の眼で彼を見詰めた。「さうですわ、わたし、かうしなければならぬからかうしたのです。貴方だつて矢張り生きなさらなくてはなりませんわ」

彼女はたつた今彼が思つたばかりのことを云つた。が最早彼は落着いてはゐられなかつた。考へも感じも全然違つて來た。彼女に對して恥づかしいと思つたばかりでなく、今迄何ものにも換へて來た彼女を失ふことが悲しくなつた。

「かうならうとは意外だつた」と彼は云つた。

「何故ですの。こんな所で何時迄も御苦勞なさるには及ばないでせう。貴方はもう随分御苦勞なさいました」

「いや、苦勞ぢやない。私は幸福だつた。出来るならもつとお前の爲めに盡くしたい」

「私共は」彼女は殊更「私共」に力を入れて云つた。「私共は何も求めてはゐません。貴方にはもう十分お世話になつたのですから……貴方が好きでなかつたのではないのなら」もつと云はうとしたが、聲が震へて云へなくなつた。

「何れにしても、お前が私に禮を云ふ理由はない」とネフリユードは云つた。

「それは私達が計算して云ふ必要はありません。神様がみんな勘定して下さいますわ」さう云つた彼女の黒い眼には涙が一杯だつた。

「お前は本當に善人だ」

「私が善人ですつて？」そして情なさうに寂しい微笑を顔に浮べた。

「もうお済みですか？」とその時英國人が聲をかけた。

「私これでお暇しませうか？」と彼女は云つた。

「私は左様ならとは云ひたくない。また會はうね」と云ひながら、ネフリユードは手を差し出した。

「御免遊ばせ」と彼女はネフリユードに聞えるか聞えない位の低い聲で云つた。そして視線が合ふと、彼女はその魅力のある眼で寂し氣に微笑した。「左様なら」と云はずに「御免遊ばせ」と云つたことによつて、彼は彼女の本当の心を知つた全く彼女は彼を愛してゐたのだ。その爲めにシモンソンと結婚して、彼を自由にさせようとしたのだ。だから矢張りネフリユードと別れることは辛かつた。彼女はネフリユードの手を握ると、急いで身を返して室を出て行つた。

ネフリユードも出て行かうとしたが、英國人が何か書いてゐるので、邪魔にならないやうに隅の方へ行つて腰を下ろした。疲労がどつと出て來た。それは寢不足からでもなく、昂奮したからでもなく、たゞ何となく世の中に厭きて了つたやうな心地だつた。彼は腰掛の背に凭れて眼を閉ぢてゐる間に、いつか深い眠りに

落ちて了つた。

「さあ、檻房を御覧になりませんか！」といふ典獄の聲がした。驚いて眼を開くと、英國人も丁度筆記を終つた所だつた。

三十

ホテルへ戻つてから、ネフリユードは床へも入らず、暫くは部屋の中を往つたり來たりしてゐた。カチューシャの爲めに彼がなすべき仕事はもう終つた。彼女に對して自分がもう不用の人間になつて了つたのが、如何にも情なく且つ恥づかしくもあつた。が彼のもう一つの仕事はまだやり遂げられてゐないばかりか、尙一層の努力を要するものだつた。これまで目撃してゐて、最近やつとその實情が解つて來た恐るべき非人道的な壓迫。然し今の彼には到底それを征服することは出來さうもなかつた。然し！然し！

歩き疲れ考へ疲れたので彼はランプの傍近く長椅子に腰を下ろした。そして今しがた英國人が紀念に呉れた聖書を机の上から取り上げた。

「この中に一切の解決があると云はれてゐるが」と彼は思った。手當り任せに頁を開いて、馬太傳第十八章一節から読み始めた。

(その時弟子たち、イエスに來りて言ふ「しからば天國にて大なるは誰か」イエス幼兒を呼び、彼等の中に置いて言ひ給ふ。「まことに汝等に告ぐ、若し汝等翻りて幼兒の如くならずば、天國に入るを得じ。されば誰にてもこの幼兒のごとく己を卑うする者は、これ天國にて大なる者なり」)

「さうだ、全くその通りに違ひない」と彼は自分が身を卑下した時にのみ、人生

の平和と歡喜を覺えたことを思ひ出しながら云つた。

(汝等如何に思ふか、百匹の羊を有てる人あらんに、若しその一匹迷はゞ、九十匹を山に遣し置き、往きて迷へるものを尋ねぬか。若し之を見出さば、誠に汝

等に告ぐ、迷はぬ九十九匹に勝りてこの一匹を喜ばん。斯の如くこの小き者の一人の亡ぶるは、天にいます汝等の父の御意にあらず)

「確かに人の亡びるのは神の心ではない。然るに此處には幾百人幾千人が亡びつゝある。しかも彼等を救ふことが出来ないんだ」と彼は思った。そしてまた讀み續けた。

(爰にペテロ御許に來りて言ふ。「主よ、わが兄弟われに對して罪を犯さば幾たび赦すべきか、七度までか」イエス言ひ給ふ「否われ七度までとは言はず、七度を七十倍するまでと言ふなり」)

現に苦しみつゝある恐るべき邪惡から人間を救ふ唯一の確かな方法は、先づすべての人間が神の前には罪人であるから、他人を罰することは出来ない。常に自覺してゐることである。彼ははつきりとかう考へた。彼が監獄や罪人宿泊所で實際に目撃したあらゆる邪惡は、警察吏や獄吏が、自ら不善でありながら他人の不

善を矯正しようとしてゐる所から起るのだ。何人も他人を罰することは出来ぬ故に、人は常に誰をでも許し、幾度でも限りなく許さねばならぬのである。この社會が今日ともかく或る程度の秩序を保たれてゐるのは、彼等獄吏や裁判官のお蔭ではなく、彼等の悪感化があるにも拘らず、人々に尙互ひに相憐み、相愛する心があるからだ、ネフリユードは断定した。

彼はそれから福音書を初めから読み返した。何時でも感動させられる山上の垂訓の所も、今始めて真に理解出来たやうな気がした。それは決して誇張した不可能の要求を述べた單なる美しい抽象的な訓へではなくして、最も簡單明白な實際上の法則である。

ネフリユードはランプを見詰めながらちつと坐つてゐたが、心は靜かに落着いてゐた。人々が皆之等の規則に従ふやうになつたら、この世の生活が如何に變つて行くかといふことが、あり／＼と眼に見えるやうな気がした。

彼はこの夜到頭終夜眠らずに、福音書を読む人によく有り勝ちな、今迄不注意で過ぎてゐた言葉の全意義が、始めて理解されたやうな喜びに全心を浸らせることが出来た。殊に馬太傳の中の葡萄園の比喩は彼をいたく感動させた。葡萄造りの農夫等は、その主人を忘れ、主人のあることを思ひ出させる者は皆殺して了ひ主人から預つてゐる葡萄園は自分自身のもの、その内にあるものは皆自分達の爲めに造られたもの、自分等の仕事はこの葡萄園の中で楽しく暮すことだと思つてゐる。

「我々もそれと同じことをしてゐるのではないか」と彼は考へた。「我々が自分の生活を支配するものは自分だと思ひ、また人間の生活は享樂する爲めに與へられたものだと思へたならば、それこそ大なる誤りである。我々は或るもの、意志によつて、或る目的の爲めにこの世へ送られたものである」

(天國と神の正義を求めよ。すべてのものは従つて得らるべし)